

昭和初年群馬県における郷土史研究者の一動向

—— 上野国箕輪町上芝古墳跡発掘調査の背景 ——

岸 田 治 男

1. は じ め に

以前から福島武雄に興味を抱いていた筆者は、福島のものした保渡田八幡塚古墳の発掘調査の⁽¹⁾結果明らかにされた埴輪の配列群が、水野正好の著名な『埴輪芸能論』⁽²⁾の基になったことを知った。そして同じ昭和4年保渡田八幡塚古墳に先立って福島の手で発掘調査され、埴輪配列研究の保渡田前史とも言うべき学史に大きな転機をもたらした上芝古墳跡⁽³⁾の発掘調査に到るのである。上芝古墳跡の発掘調査は、「この調査によって、円筒埴輪と形象埴輪の樹立位置の関係や個々の形象埴輪間の配列の関係が詳細に記録されたが、この調査方法と新事実の発見は後の研究に大きな影響を与えた」⁽⁴⁾とされ、当時の考古学界にかなりの衝撃を齎した点で埴輪配列研究史上特筆に値する。

しかし該発掘調査の提起する課題は、埴輪配列研究に資する「新事実の発見」ばかりでなく、福島武雄や岩沢正作の組織的調査方法と直接調査には関与しないものの『上毛郷土史研究会』を通じて有形無形の援助者である豊国覚堂並びに同研究会に集うあまたの郷土史研究者の動向の把握にあると思量される。『上毛郷土史研究会』の機関誌『上毛及上毛人』は、そんな当時の人々の息吹や知的体温を窺い知ることのできる好個の資料である。その内容は「考古学関連の記事は、郷土研究の一環として位置付けられ、大正期では明治期以来の傾向を引き継いだ遺跡・遺物の発見と紹介文が多く、なかでも古墳・埴輪などの個別報告が目立つ。昭和期に入るとやや傾向を異にして、中央学界の研究成果が導入されはじめ、岩沢を中心にした学術的色彩の強い論考も見られるようになる。」⁽⁵⁾というもので、大方の論考は郷土雑誌の域をでないものであったが、そんな中であって福島武雄や岩沢正作の論考は「学術的色彩の強い」確実な方法論をもつものであった。

上芝古墳跡の発掘調査の概要については、その評価の高い調査報告書や『上毛及上毛人』の記述によって窺い知ることができる。また当時の『人類学雑誌』⁽⁶⁾や『考古学』誌上でも、福島武雄や岩沢正作たちの組織的調査方法による成果が絶賛を博したのは周知の事実である。

ところが、かような記念碑的事実の背景に存在し、かつそれらの現象を必然たらしめる人間たちの思想的営為や地域に蓄積された知的遺産（郷土史研究等）の有様については、ほとんど言及されていない。

そこで筆者は『上毛及上毛人』⁽⁸⁾と『昭和3年11月現在郷土史研究者名簿』⁽⁹⁾の分析と検討を通じて、それらに係わった人々が直接的にしる間接的にしろいかに上芝古墳跡前史に関与し、さらに上芝古墳跡の発掘調査を支えていったのかを明らかにしていきたい。

2.『上毛及上毛人』と『昭和3年11月現在郷土史研究者名簿』

筆者は昨秋県立図書館の郷土資料コーナーで、茶色に変色した謄写版刷りの古い冊子を手にした。それは朱筆で豊国覚堂直筆のメモの入った『昭和3年11月現在郷土史研究者名簿』と記されたレジュメであった。その名簿は京都帝国大学教授黒正巖の手になるもので、その用途は「(前略)最近幸にして地方史の研究が盛んとなり、各地の特志研究者が続出するに至ったことは、学界のため誠に慶賀に耐えない。(中略)ここに於いて余は2,3年来郷土史家名簿の作製を思ひ予め各地方に問い合わせせて郷土史家並びにその研究機関を調査した。(後略)」というものであった。

『昭和3年11月現在郷土史研究者名簿』から窺えるポイントが3つある。

- ①他県に比較して群馬県は抜群の郷土史研究者数であり、全国平均13.2人の4倍強で、全国の郷土史研究者数の9.5%にあたる。
- ②群馬県郷土史研究者の内訳を見ると、ほぼ各郡市にその名を見いだすことができる。
- ③また該名簿掲載者のほとんどが各郡市の郡誌編纂に携わった有力な郷土史研究者であり、郷土誌『上毛及上毛人』の主要な書き手である。

かような事実はどのように解釈出来るのであろうか。『郷土史研究者名簿』の序に拠れば、名簿の作製においては「各地方に問い合わせせて郷土史家並びにその研究機関を調査した」のであり、おそらく群馬県においてはその問い合わせ先は『上毛郷土史研究会』⁽¹⁾の豊国覚堂のもとであったはずである。そして豊国覚堂は昭和3年当時の上毛郷土史研究会会員1500余名の中から、郷土史研究者に値する『上毛及上毛人』の論客58名を報告したものと思われる。

「史蹟名勝天然紀念物保存法」が大正8年(1919)に制定されて、群馬県では大正末年以降昭和3年(1928)までには、大正8年の『総社史蹟保存会』⁽²⁾の設立を嚆矢として、県内の多くの市町村に郷土史研究団体が創立され、すでに大正2年(1913)豊国覚堂によって創始されていた『上毛郷土史研究会』とのネットワークが形成されていった。ちなみに本稿の舞台となる箕輪町でも、昭和2年に『箕輪史蹟保存会』が箕輪城址御前曲輪での長野氏墓石の発掘を契機に成立している。つまり『郷土史研究者名簿』の数字は実体の無い架空のものでなく、昭和3年時点での『上毛郷土史研究会』を中心とする群馬県内の郷土史研究者のネットワークが、他県に先駆けてほぼ完成していた故の現象であることが理解される。

すでに述べたように豊国覚堂の手になる『上毛郷土史研究会』は大正2年に成立を見て、その機関誌である『上毛及上毛人』が創刊されるのは翌年の大正3年だが、経営上の理由から3号で休刊し、本格的な復刊第1号は大正5年の刊行になる。爾来昭和17年の最終刊まで297号を数え、復刊前の3号を加えれば300号の大部となった。そしてその中身は佐藤錠太郎の『上毛及上毛人の200号を祝し』の言のように「(前略)『上毛及上毛人』が、親しむべき天然紀念物を語り、記憶すべき史実史蹟を明らかにし、崇敬すべき先人偉績の跡を詳かにし、或は散失せんとする幾多郷土の文献を求めて印行し、あらゆる部面に亘りて、郷土文化の闡明に絶大なる貢献をなしたことは勿論、郷土人をして郷土反省の心を起こさしめ、郷土研究の態度を進め、郷土愛護の情を殷なら

しめたその功績は、今ここに徒なる言辞羅列の必要を認めないところである⁽¹²⁾」という郷土色の強いものであった。

『上毛及上毛人』復刊の宣言で豊国覚堂は、「能く其家を愛する者にして其郷土を愛せざるは非ず。其郷土を愛する者にして其君国に忠愛ならざるは非ず。其君国に忠愛なる者にして其歴史を敬愛せざるは非ず。苟も其歴史を敬愛する者にして我が郷土研究の事業に賛同せざるは非ざる也。」と天皇制家父長主義そのままに語り、後年大東亜戦争に際して『上毛及上毛人』が抵抗感なく大政翼賛に収斂していった思想的基盤がすでにここに介在していたと思える。そしてそれが戦前の群馬県郷土史研究の限界でもあった。

『上毛及上毛人』の考古学関係論考については、大正5年の復刊2号以来ほぼ毎号に掲載がなされている。大正5年から昭和4年（上芝古墳址発掘年）までの考古学関係論考数は196編を数え、そのジャンルは古墳（石棺・石室・埴輪）、金石文、寺院址、古瓦、国府、城址、古銭、窯跡、縄文土器等の多岐に亘っている。そしてその数は、年を経るごとに増加する傾向が看取される。ちなみに古墳に係わる論考を数えると64編があげられ、その割合は33%を占めている。ただ約13年に亘る年月の間には、時代の画期を如実に表した論調や論旨の変化が確実に認められるということも事実である。最初豊国覚堂の張った論陣は、高山彦九郎や福田宗禎等の先人の顕彰と多胡碑等の史蹟の紹介が主で、考古学とは程遠い憾があった。『上毛及上毛人』の論調の変化は、大正8年の「史蹟名勝天然紀念物保存法」の制定と軌を一にするようにして登場する岩沢正作の一連の史蹟調査記録という形で立ち現れる。岩沢の『上毛及上毛人』に於けるデビューは、該誌64号（大正11年）の『笠懸村古代瓦の窯跡発見始末』⁽¹⁴⁾で、これは彼一流の史蹟調査の成果である。岩沢正作は博物学者であり、その方法論を用いた論考は地質・地名・縄文式土器等の多岐に亘っている。

岩沢とともに上芝古墳址の発掘調査を担った福島武雄は、さらに明確な方法論のもとに古墳の石室・石棺の調査や古城址調査を手掛け、『上毛及上毛人』の最盛期を岩沢正作とともに現出する。福島は建築石材学専攻の工学士で、築城学者としても評価を得つつあった。ところが上芝古墳址と保渡田八幡塚古墳の発掘調査に力を使い果たしたかのようにして福島武雄は夭折してしまう。大正10年（1921）『上毛及上毛人』53号のデビュー以来僅か44篇の論考を残しただけで、32歳の若さで福島は一瞬の光芒のように群馬県郷土史研究界を駆け抜けてしまうのである。ここにも大きな画期を認めることができる。

福島の死と符を合わせるかのように、岩沢正作は「当時の郷土研究に対する批判からより学術的な傾向の強い研究会を志向し」⁽¹⁵⁾昭和4年『毛野研究会』⁽¹⁶⁾を作り、昭和6年に郷土雑誌『毛野』⁽¹⁷⁾を創刊して、豊国覚堂の『上毛及上毛人』との関係も疎遠になっていく。そんな時期に頭角を顕し、覚堂の期待を一身に集めるのが相川龍雄である。龍雄は相川之賀の長男で、考古学に早熟な才能を示し、昭和3年弱冠22歳で佐波郡の考古遺物・遺構の概説書である『佐波の古蹟』⁽¹⁸⁾を刊行している。また昭和8年（1933）には後藤守一と共に白石稻荷山古墳⁽¹⁹⁾の発掘調査を行い、大きな成果を上げている。しかし相川龍雄の活躍した時期は、不運にも日中戦争から大東亜戦争に時代

が押し流されて行く狭間にあたり、龍雄自身も兵役や不安定な体調に悩まされ、不本意な日々を送らざるを得なかったらしい。

「思うに『上毛及上毛人』200冊は、悉くこれ郷土人が建てたる研究調査の金字塔で、亦他に求むべからざる指針であり、資料であり重宝である。而してかかる機関誌を有つことは、我が郷土人の幸福であって、また我が郷土が有つ誇りであると信ずる。」⁽²⁰⁾という前掲の佐藤錠太郎の述べるように、『上毛及上毛人』は『上毛郷土史研究会』の機関誌として、多くの郷土史研究者の集うそのネットワークの情報源であり、「他に求むべからざる指針」であった。煎じつめれば、かような豊国覚堂の組織した知的遺産(『上毛郷土史研究会』、『上毛考古会』、機関誌『上毛及上毛人』、郷土史研究者のネットワーク)が、昭和4年2月の上芝古墳趾の発掘調査に連なっていくものと思考される。

3. 「上毛及上毛人」における覚堂・正作・武雄

この章では『上毛及上毛人』における3人の論考について、なかでも箕輪町上芝古墳趾(現在箕郷町)の発掘調査に深くかわりあった人達の思想と行動を、諸論考から分析していく。彼らは己の思想と行動原理について直截に語るといことは殆どなく寡黙ですらある。しかし彼らの為せる事実報告及び論考を分析・検討することによって、その行間に潜む彼らの郷土史研究の思想と行動について述べようとする。

(1) 豊国覚堂～「郷土本位」の思想

「飽くまで郷土本位たれ」⁽²¹⁾ 豊国覚堂のこの言は、大正6年の『上毛及上毛人』7号の巻頭を飾る檄文の主題である。該稿は直接的には郷土史研究に言及するものではないが、郷土史研究に於ける覚堂の思想と行動の基本原則を端的に敷衍するとかような表現をとるものと考えられる。

豊国覚堂、覚堂は号で本名は義孝。戦前の群馬県郷土史研究を一貫して支え続けた偉大な峰である。1865年(慶応元年)多野郡日野村興春寺の住職田川義水の長男として生を受けた覚堂は、1879年(明治12年)14歳にして故郷を離れ、勢多郡大胡町大字堀越の長善寺の豊国洞伝の養子となる。その間の事情については本稿では詳しく語るべくもないが、離郷せざるを得なかった14歳の少年の心に、幾莫かの寂寥たる感情が去来したと推量してもあながち無理ではあるまい。その後前橋の群馬曹洞宗専門学校に学び、1886年21歳で長善寺の住職となった覚堂は、廃仏毀釈の嵐の後の「寺院は檀家と信仰を通して強く結合するだけでなく、多くの人々が仏教信仰を持つための社会運動を起こす必要がある」⁽²²⁾という仏教界の新運動に共鳴して東京の曹洞宗説教所に入所した。若い豊国覚堂にとって東京での3カ月間のあけくれは、いかようなものであったか少ない資料の下では想像するしか方法がないが、推量を逞しくすれば新知識の吸収と同時に都会の喧噪の中で群馬県人としてのアイデンティティを強く意識させられたに違いない。群馬に帰郷した覚堂は文筆活動の比重を次第に高め、新聞記者として言論活動に磨きをかけ、明治35年には「阪東日報」⁽²³⁾の創立に参加し、経理を担当しながら編集長として活躍した。この時の経験が後に『上毛

及上毛人』の経営に生きたものと思われる。

豊国覚堂のたどった道を反芻すると、彼の「郷土本位」の思想はある必然を伴って信念にまで昇華している気がする。それは幼き日の離郷であり、若き日の群馬県人としての矜持の目覚めであり、言論人としての時流を読む目でもあった。それらの諸要素が覚堂をして「郷土本位」の思想を形作らせたのである。

それでは豊国覚堂はその「郷土本位」の思想あるいは行動原理をいかようにして実現しようとしたのだろうか。彼は言う。「憶ふに郷土誌の編纂は一回やれば夫れで責任解除といふ譯では無からうと存じます。年々変移していく事柄には年々改訂を加え、古代の史蹟の如きは其研究を重ねるに随て、益々新発見が加はって行かなければ成りません。例せば一個の石器、半片の土器乃至一塊の墳墓に対しても益々新発見を増す許りでありますから、其研究眼も益々向上して行かねばならぬのであります。又其地方の活動発展して行くということは、即ち日に月に歴史を造りつつあるもので有れば、其都度之が事実を記録と為し、積で後世に遺留し、他日の資料に供せねばなりません。是の如く市町村～住民の活動振りは一々歴史の発現に外ならぬのであるから、之を描写するには少しの油断も猶予もあるべき筈がないのであります。」⁽²⁴⁾ここに豊国覚堂の郷土史研究における思想表現としての双輪ともいうべき、『上毛郷土史研究会』と郷土誌『上毛及上毛人』の存在理由がいみじくも語られている。すなわち覚堂は「一個の石器、半片の土器乃至一塊の墳墓に対しても益々新発見を増す許りでありますから、其研究眼も益々向上して行かねばならぬ」との認識から『上毛郷土史研究会』を創立し、「日に月に歴史を造りつつあるもので有れば、其都度之が事実を記録と為し、積で後世に遺留し、他日の資料に供する」為に機関誌『上毛及上毛人』を創刊したのであった。

『上毛郷土史研究会』は大正2年に設立され、事実上の活動は大正11年に組織された『上毛考古会』⁽²⁵⁾として昭和6年の藤岡十峯閣の上毛考古会例会まで都合19回を数え、群馬県郷土史研究の総本山としてあまたの郷土史研究者の交流の場を提供し続けた。交通・通信の未整備な大正から昭和初年にかけての時代状況の中で、収集品の展覧や情報交換・郷土史研究の仲間同士の友誼の結び合い等非常に有益で意味の有る場であったに違いない。ちなみに生涯の友でもあった原田龍雄⁽²⁶⁾と福島武雄との出会いは前橋の臨江閣での例会が機縁であった。また豊国覚堂にしても畏友相川之賀⁽²⁷⁾との深い親交は『上毛考古会』を通じてのものであった。

時はあたかも第一次世界大戦後の国際情勢の変化に応じて、新国民育成のための通俗教育運動である民力涵養運動（第一次世界大戦後大正8年～大正後期）が鼓舞され始めてもいた。大正12年には地方の郷土意識の中核たる郡制が廃止され、郷土という枠組みにあらたなパラダイムが要請され始めた時代に遭遇して、「史蹟名勝天然紀念物保存法」の制定に力を得た覚堂は『上毛郷土史研究会』を母体とした『上毛考古会』を組織する。時に豊国覚堂はすでに齢50を越えていた。内務省令「史蹟名勝天然紀念物保存法」の制定された翌年の大正9年『上毛及上毛人』第44号の冒頭に、『歴史は主。史蹟は客。』と題する覚堂の論考がある。「(前略) 然るに熟々想に史蹟や名

勝や天然記念物を保存するということは、謂はばお客仕事でありまして、夫れよりも御主人となるべき大切の事柄の存在を忘れては成りません。主人とは何ぞや、即ち歴史其物であります。歴史が闡明されて然る後始めて史蹟の保存問題も起こるので、歴史が明らかに講究せられざる限りは史蹟の尊重すべきことも判明しないではありませんか。言い換ゆれば歴史は実体であって、史蹟は其影法師に過ぎないのであります。(後略)⁽²⁸⁾」この豊国覚堂の「歴史は主。史蹟は客。」という主張は、大正3年の創刊以来昭和16年の終刊まで300号に亙り『上毛及上毛人』の誌面に流れる主題であったと言える。この覚堂の眼差しと「郷土本位」の思想との交点に彼の郷土史研究の行動原理が介在していた。

『大正9年の年頭に際して』(『上毛及上毛人』37号)で、覚堂は「(前略)之に就いて第一に感ずるは、古墳並びに其埋蔵物の保存之を学問的に期待して、秩序ある研究を遂げ、而して其結果を天下に公表することであります(後略)」⁽²⁹⁾として、群馬県の誇るべきものとしてあまた存在する古墳をあげ、その「学問的に秩序ある研究」を要請している。この当時すでに宮崎県西都原古墳群⁽³⁰⁾では、大正元年以来大正8年まで当代一流の考古学者達(黒板勝美・浜田耕作・梅原末治等)の手による計画的な学術調査が実施され、その報告書も3冊刊行されていた。それゆえに覚堂の脳裏には、宮崎県に勝るとも劣らない古墳王国としての群馬に対する矜持があったに違いない。

しかし豊国覚堂はあと10年の歳月を待たねばならなかった。覚堂の期待の星である福島武雄の手になる「箕輪町上芝古墳趾」の発掘調査の全貌が明らかになって、古墳王国群馬の名が高らかに世間に喧傳されるのは、昭和4年2月のことである。

(2) 岩沢正作～脚任せの努力主義

「(前略)先ず吾徒の知れる範囲では本県斯学会の元老としては伊勢崎の相川之賀君、大間々の岩沢正作君、藤岡の浅美作兵衛君を挙げて見やうと思ふ。相川君は不言実行家で斯学に関する新古書籍の蒐集に於いて最も秀で、岩沢君は搜訪実査、脚痕広く各地に印する點に於いて勝り、浅見君は廣探遠索、金を投じ足を労して多数蒐集するを以て専要とし、三者各特長を有して居るが(後略)」⁽³¹⁾とは豊国覚堂の評である。覚堂の評は岩沢正作に関する限りまさに的を射ており、「搜訪実査、脚痕広く各地に印する」史蹟調査・踏査の類はほぼ群馬県各地に及んでいる。そこに「脚任せの努力主義」者岩沢正作の面目躍如たるものがある。

次に岩沢正作の「脚任せの努力主義」の内容について、彼の昭和5年の論考である『上毛及上毛人』163号掲載の「吾経路を顧み同学新進諸君に一言す」を引用して検討する。時に正作は54歳であるが、前年に『毛野研究会』を設立し、翌年には郷土雑誌『毛野』を刊行しようとする盛り の時代である。岩沢は彼独特の軽妙洒脱な語り口で「(前略)今私は郷土研究に指を染めつつあるのであるが、私の此處に到った経路を顧みると、舊幕時代の木内石亭の跡を辿った感がある。(中略)私の進んで来た経路は勿論石亭流であった。私は植物動物の標本採集鉞物岩石の標本採集から化石の蒐集、石器古瓦の蒐集にまで進んで、今日の境遇となった。其出发点が標本の採集から出てゐるので、遺物の探索に熱中し過ぎて遺跡の測定を忘れるという傾きのあることを、今でも

尚短所としてゐる。併し私の遺物探索の方針は土器片や石鏃屑を片端から注意拾得して、他のものはあつたら拾得する主義で、珍品主義は採らず、普遍的のものに重きを置いた。此主義で進むと何處に行つても、何程かの得物はあるから失望はしない。此處が私の土器片や打製石器のみ多く堆積して喜んでゐると定評された所である。従つて私の蒐集品は金力主義でなく、脚に任せて蒐めた努力主義によつたものであるから、手許にある程の遺物の出土地には何種のものが多かつた位のことは判然してゐる。標本即ち参考品は別として出所不明のものは禁物としてゐる。これだけは買って貰いたい。けれども重ねて言うが私の踏み來つた経路は現代の研究法に適つてゐなかつた（後略）⁽³²⁾」と回想する。

岩沢正作は16歳からの數年間、理科大学卒業の寺崎留吉から博物学の手ほどきを受け、このことが何でも知つてやろうという旺盛な知識欲をもつ正作の氣質と一致し、彼の生涯の方向を決定したと言える。博物学は natural history の訳であり動物学、植物学、鉱物学の総称で、江戸時代の「本草学」の流れを汲むといわれる。博物学の方法論は採集と分類である。正作の郷土史研究の方法論は「其出发点が標本の採集から出てゐるので」と述懐しているように、まさしく博物学のそれであつた。岩沢正作はこの方法論を武器に山羊髭を顎にたくわえ、群馬の山野を跋涉するのである。

岩沢正作と豊国覚堂との出会いは確かではないが、大正5年頃ではないかと思われる。労作『赤城山』⁽³³⁾を自費出版した正作に注目した覚堂からの何等かの接触があつたに違いない。正作は翌年の12月『上毛郷土史研究会』に入会している。

「今私は郷土研究に指を染めつつあるのであるが」と語る岩沢の胸には大いなる鬱懷が窺える。大正末年から昭和初年当時の郷土研究の現状は、いみじくも豊国覚堂が群馬県における郷土史研究の代表と評価した人物すら「浅見君は廣探遠索、金を投じ足を労して多數蒐集するを以て専業とし」と、正作に言わせれば「金力主義」であり「珍品主義」の、仮に相川龍雄の言うように系統的・組織的であるとしても、木内石亭流であつた。だからといって浅見作兵衛を責めることは当たらないであらう。豊国覚堂にも相川之賀にもその通弊は見られ、岩沢正作自身の内にも旧時代の痕跡は存在していた。しかし岩沢の「脚任せの努力主義」からすれば郷土研究は「假令遺物を遺物として蒐めても、発見地の不明なものは要するに一の標本であつて郷土研究の資料とはなり得ない」のであり、「遺物探索の方針は土器片や石鏃屑を片端から注意拾得して、他の物はあつたら拾得する主義で、珍品主義は採らず普遍的の物に重きを置いた」極めて学問的なものでなければならなかつた。後年『毛野研究会』を創立し、機関誌『毛野』を刊行せざるを得ない誘因に、この研究法の相違を挙げてもあながち穿ち過ぎでもあるまい。

岩沢正作の『上毛及上毛人』における最初の論考は『笠懸村古代瓦の窯跡発見始末』⁽³⁴⁾（大正11年64号）で、これはまさに「脚任せの努力主義」の輝かしい成果であり、今なお山際瓦窯跡として群馬の古代史に重要な位置を占めている。爾來正作の『上毛及上毛人』における論考は77編を数え、福島武雄とともに一時代を築いた。その論考を分野別に見ると考古が1/3と断然多く、地質・

伝説・地名・環境問題⁽³⁵⁾とその関心は多岐にわたり、博物学者岩沢正作の幅広さを見る思いがする。

『上毛及上毛人』における正作の論考の白眉は、昭和2年119号から昭和5年153号まで21回にわたって連載された『上毛地質学講話』であろう。この成立事情については上毛地質学講話叙言に詳しい。それによれば国史講習会が大正15年に刊行開始した『考古学講座・地質及古生物篇』⁽³⁶⁾は「相当地質学の素養あるものにして、初めて了解し得られる程度で地方にありて普通考古学に興味を持つ位の程度のものには、稍難解であるという批評を度々耳にしてゐた」それゆえに「上毛考古会員のために、可成的平易に而も考古学的にして、而して本県に関係を持たせて、地質学の大要を記述しては何か」という勧めを豊国覚堂を始め相川之賀や原田龍雄等から受けて、「従来学習した先輩の所説を平易に綴り、これに県下に於て実地見聞した処を引証し、且出来得る限り考古学資料を加味する」という方針で取り組んだものであった。「平易に而も考古学的にして、而して本県に関係を持たせて、地質学の要を記述して」という難問をクリアできる人間は、当時群馬県においては岩沢正作において外はなく、赤城山登山200回を数え県内を一巡したと豪語する「脚任せの努力主義」者岩沢の独壇場であった。彼の「上毛地質学講話」は概略構成において『考古学講座・地質及古生物篇』を下敷きにしてはいるものの、その内容は具体的で示唆に富み、正作の論考中でも随一のものである。

「重ねて言ふが私の踏み来った経路は現代の研究法に適ってゐなかつた」（前掲『吾経路を顧み同学新進諸君に一言す』より）という時の、岩沢正作の脳裏には知己の少壮の考古学者後藤守一や若き中谷治宇二郎・大場磐雄等の影が去来していたに違いない。大場磐雄との交流はすでに大正15年には始まっており、同年起稿の『上毛に於ける石器時代土器各派に就て（下）』⁽³⁷⁾では、旧姓谷川の名で大場の考古学雑誌に於ける所見が随所に引用されている。また岩沢は諸磯式土器について「出来得る限り県内に於ける分布等を調査して谷川氏に応援を期する覚悟である」と述べ、大場の強い影響力のもとで得意の「脚任せの努力主義」に磨きをかけようと決意する。

中谷治宇二郎は昭和4年に『日本石器時代提要』⁽³⁸⁾を僅か27歳で上梓しており、彼独自の研究方法（分布論や様式分類）による縄文文化の解明は岩沢正作にとって衝撃的でさえあったと思える。岩沢と中谷の知己がいつ結ばれたかは不明だがおそらく昭和2年8月に近い時期で、三山閣所蔵品を見合いながら中谷は正作の軽妙な弁舌に引き込まれ、正作は中谷の眩いばかりの若さと才気に感嘆し、互いに意気投合したことだろう。しかし岩沢の「脚任せの努力主義」の次にくる命題は、縄文土器の蒐集・分類そして編年という方法を駆使しての地域的展開のはずであった。

帝室博物館鑑査官後藤守一との出会いは大正13年の後藤守一の群馬研究旅行が機縁であると思われるが、赤堀茶臼山古墳の発掘調査の際にも相川之賀とともに物心両面での援助を惜しまなかった。岩沢正作は後藤を中心とする帝室博物館グループの組織的・学術的調査方法を目の当たりに見て、「現代の研究法」と自分等の方法との画然とした彼我の差に新しい時代を感得した。

昭和4年2月の上芝古墳⁽⁴⁰⁾の発掘調査と福島武雄に代わる報告書の作成に大きく関与したのは「脚任せの努力主義」の大いなる成果である『上毛地質学講話』の力と後藤（昭和2年刊行の『日

本考古学』は熟読玩味していたに相違ないが) や中谷との交誼の中から正作が自ら学んだ「現代の研究法」による成果ではなかったか。

岩沢正作と中央の学者の媒介項は、「脚任せの努力主義」で群馬県の各地を渉猟して蒐集した膨大な量の土器片や石器類と彼の経験情報であった。例えば正作の蒐集資料の中から杉原荘介が目ざとく弥生土器を見だし「樽式土器」設定の端緒としたように、彼の蒐集品は「金力主義でなく、脚に任せて蒐めた努力主義によったものであるから、手許にある程の遺物の出土地には何種のものが多かった位のことは判然してゐる。標本即ち参考品は別として出所不明のものは禁物としてゐる。」ために、当時としては岩沢の情報と併せて第一級の一次資料となっている。

かような知的交流のなかから、「現代の研究法に適ってゐなかった」とする岩沢正作の方法論は、昭和5年以降の八幡一郎との友誼も含めて、かなりの深まりを見せていくものと思考される。

(3) 福島武雄～「科学趣味」の考古学

福島武雄には郷土史に造詣の深い兄福島博⁽⁴²⁾がいた。武雄の兄博は早くから豊国覚堂や岩沢正作と交誼を結び郷土史研究に興味を示し、内務省令「史跡名勝天然紀念物保存法」の制定された大正8年には『総社史蹟名勝天然紀念物保存会』を創立している。福島兄弟の生まれ育った総社の地は至るところに古墳や古城址等の史跡が溢れ、生来の郷土史研究者を育むに十分な環境であった。また兄博は大正10年群馬県史跡名勝天然記念物調査委員を豊国・相川・岩沢等と共に委嘱されており、群馬県における郷土史研究者の中核にいたことが窺える。そんな郷土史研究の雰囲気⁽⁴³⁾の溢れるなかで、若き福島武雄が郷土史研究に手を染めるのは必然の成り行きであったと言える。

福島の郷土史研究の方法論を形作るもう一方の要素に、建築石材学という極めて合理性と計数性に富んだ学問を基底に持つ点が挙げられる。武雄は早稲田大学理工科採鉱冶金科の最初の卒業生であり、石材会社に就職した岩石学のプロフェッショナルでもあった。

福島武雄は大正10年『上毛及上毛人』53号のデビュー以来、31編の論考をその若すぎる死の前年(昭和4年)まで『上毛及上毛人』誌上に発表している。福島は大正12年現在に於ける群馬県史・郡史編纂や史蹟名勝天然記念物調査の計画を踏まえて「これらの潮流に従って建築石材学を専攻する私も強いて考古学との間に連絡を付けて鉄槌を振りながら、古墳、城跡、金石文或は古瓦等について自分の定めた方針に従って調査を初めております。」(69号『本県の古墳に就いて読者諸賢にお願い』)と述べている。それでは福島の「自分の定めた方針、とはいかようなものであったろうか。その一つの解答を『上毛及上毛人』71号所載の『古墳行脚(石棺の部)』の一節の中に見いだすことができる。「総て科学の研究は、同類を集めることにその源を発している。集めたものを系統だてて分類し、それらの関係を調査し、一定の法則を見いだすことが広い意味の科学であるとも考えられる。自分は科学をかように解釈して、目的に到達するまでの道程を楽しむものである。」⁽⁴⁴⁾という優れて学問的な認識を示して、福島は考古学に立ち向かおうとする。

前掲の『古墳行脚』のなかで「総て科学の研究は同類を集めることにその源を発している」と語る福島はさらに『本縣の古墳に就て読者諸賢に御願い』で「(前略) 本縣の大部分の古墳の如く

遺物が已に散乱し単に骨董癖のみの満足を計る人々の手に亘った今日に於いては、幸に遺物の残されたる少数の古墳と比較研究する為には其外形、石室の積方等の外、石棺の形式、石質の如何等を調査する事が必要であります。(中略)これ等の考へから2月号以下に於て私の野帳の中から毎月2つ位ずつ図を澤山入れて記載し最後に纏めて見たいと思ひます。是を第一歩として縣下の各古墳墓に付て調査致したいと思ひます。(中略)そこで皆様に御願ひする事は記載洩れの石棺所在地を豊国主幹へなり又は総社町の私の所へなり御知らせを願ひます。其外遺物、石室其他分布に就ても一定の方針の下に調査して見たいと思ひますから、續々本誌上に御発表あらん事を願ひ致します。本縣の様に考古学的調査が不十分な所では古墳に限らず、総ての遺跡の一覧表を作る事が刻下最大の急務であります。⁽⁴⁵⁾」と述べ、自らは『縣下石棺所在地名表』⁽⁴⁶⁾『群馬県古瓦発見地名表』⁽⁴⁷⁾をものしている。また『古墳行脚』や『野帳から』に窺える「測定図はなるべく澤山入れて、本文は図の足らない所を補う位にしておきたい⁽⁴⁸⁾」という主張を裏付ける正確な測量図と測定値は、合理性と計数性を重んずる科学者福島武雄の矜持でもある。付言すると福島⁽⁴⁹⁾の学問レベルは「福島はまた、石棺の研究に意を注ぎ、高精度な実測図を作成し、石棺の型式学的研究をめざした。これは日本の古墳研究史に照らしてみると、その先驅をなすものの一つであり注目に値する。」という程の極めて高いものであった。

かようにして郷土群馬の現状を適確に分析し処方箋を下す福島武雄の姿に、群馬県郷土史研究の曙光を見たのは豊国覚堂一人ではなかったろう。

略年譜からも知れるように、武雄は幼いころから農家の配置や構造を調べるといふおもしろくない興味のありようを示している。しかしこの少年の日の体験が彼の城址研究の発端になり、大学に於いて建築石材学という特殊な学問を専攻する動機となったことは種々の状況から明らかである。福島武雄は築城学者としても希有の才能を期待されていた。その主な論考には『上毛及上毛人』に発表された『古城址調査のしおり』⁽⁵⁰⁾『箕輪城考』⁽⁵¹⁾『大胡城考』⁽⁵²⁾とサンデー毎日に掲載された『大阪城の巨石』⁽⁵³⁾がある。福島は『箕輪城考』の結尾で「此稿の起草に当たって執った予の態度は、城郭の部に於ては遺跡の調査を第一とした。之を土台として築城術変遷の事実を経とし、当時の戦術を緯とし、之に従来の記録類を以て彩色を付けた。従つて従来の戦記録は全然之を無視した場合もあり、之に依つた所もある。其取捨は古代兵学上の常識に依つた考へである。」⁽⁵⁴⁾というように、古城址調査についても「城の研究は立派に考古学の一分科」との認識で「遺跡の調査を第一」とし、十数年に亘つて群馬県の城址100カ所以上から集めた情報を帰納して推論するという優れて科学的手法を駆使して成功を収めている。

「本縣の様に考古学的調査が不十分な所では」⁽⁵⁵⁾と述べる福島武雄のイメージはどのような考古学的調査を指向していたのだろうか。大正12年の時点での考古学的調査と言えば、大正元年から7年まで数次に亘つて一流学者を動員して実施された宮崎県西都原古墳群の発掘調査であろう。それらの発掘調査は、それぞれの担当者の問題意識や考え方により内容のバラツキがあり、統一したものとはならなかったが、古墳群を初めて計画的に調査したという学史上の意義は大きい。

大正9年には梅原末治が京都府久津川古墳⁽⁵⁶⁾の墳形・内部主体・副葬品を総合的に研究し、古墳の編年の基礎を作る時期でもあった。また貝塚の分層的発掘が盛んに行われ、ともすれば科学的⁽⁵⁷⁾方法に欠けるところのあった、明治期の人種・民族論を主軸とする考古学を克服する、新しい研究⁽⁵⁸⁾動向が輝きを増してきていた。武雄の「科学趣味の考古学」はかような時代状況の下で形成され、昭和4年2月の上芝古墳址との運命的な出会いを迎えるのである。

福島武雄は昭和2年9月の吾妻郡史蹟視察旅行以来中谷治宇二郎⁽⁵⁹⁾との昵懇の関係を築くのだが、彼の「科学趣味」と中谷の「(前略)然し昭和4年以後、私は日本を離れると同時に、自分の行くべき路は必然的に決定された。それは考古学(私の場合常にこの言葉は先史考古学を指している)を実験科学にまで持ち来たらそうとする事である。考古学を分類を基礎にした思考的な実験科学にしなければならない。少なくともそうなし得る部分だけでもそうしなければならない。我々は鋤で考古学を考える様な愚を離れて、机の上で鉛筆を持って考える可きである。精密なる方法上の準備、結論への思考、材料は特に我が国に於いては充分すぎる程充分なのである。小地域に1万個以上の新石器時代遺跡が報告されていて、それでも尚日本石器時代学が成立しないならば何れの国にあってもそれは成立し得ない学問となってしまう。我々は新しい資料を地下に求め⁽⁶⁰⁾るよりも学する心を自分自身の中に探す可きではなからうか。」という言のあまりの類似性に驚かされる。岩沢正作にとってもそうであったように、福島にとって中谷の分布論や伝播論を駆使した諸研究と暖かい人柄は魅力であったに相違ない。しかも福島も中谷もかたや工学士でかたや理学士という自然科学の方法論を身につけた二人である。二人の考古学者を結ぶ媒介項は福島に於ける「一定の方針」「科学趣味」であり、中谷に於ける「分類を基礎にした思考科学」「精密なる方法上の準備」であったと思える。

福島武雄という科学的方法論を理解した類い稀な個性が、地質学者岩沢正作の援助を得て、豊国覚堂の大正10年来の熱望である「学問的に秩序ある研究」に着手するのは昭和4年2月である。

4. 昭和4年2月箕輪町上芝古墳址の発掘調査

(1) 経緯

昭和2年8月上旬の残暑厳しい頃であった。当時の上毛新聞には次のような記事が掲載されている。それは「群馬郡箕輪町箕輪城址附近が客月上旬の大雷雨白川増水にて決壊した附近から古井戸を発見し其井戸の中から古い石碑等が発見された(後略)」というものであった。詳細については『上毛及上毛人』127号に載せられた「箕輪城址本丸御前曲輪古井戸出土五輪塔金石文について」⁽⁶¹⁾に詳しい。それによると「出土の墓石146個、最も古きは康元元年2月9日の陰刻のある五輪塔である」で、ちなみに康元元年は1256年であり、さらに墓石を精査すると長野氏累代の墓石十余基が確認された。その後、昭和3年1月臨江閣に於ける『上毛考古会』新年会の席上での下田恭介氏の弁によれば「客秋箕輪城址御前曲輪の古井戸七十余尺の底部より長野氏累代の墓石十余基を発掘したるを動機として、是等の物を始め、其他の名所旧跡を保存すべく、客冬箕輪史

蹟保存会設置」したのであった。これが上芝古墳址にまつわる物語の全ての始まりである。

昭和初年当時は全国的な郷土史研究の高揚した時代で、群馬県でも各地で郷土史研究会が設立されて、豊国覚堂の『上毛郷土史研究会』とネットワークを結びつつある時期でもあった。そんな時流の中で『箕輪史蹟保存会』の誕生を見たのである。新興の機運著しい『箕輪史蹟保存会』のメンバーは、下田恭介会長のもと遺物発見の場合には報告し調査を行うことを申し合わせていた。上芝古墳址の所在する箕輪町大字上芝字本町1093番地は増田銀次郎氏の土地で、氏は『箕輪史蹟保存会』の会員であり考古学にかなりの興味を持っていた。これが第一の幸運である。

「群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告第2輯・上芝古墳址第2節発掘前の状態」によれば「本古墳址の存在する1093番土地は、数年前迄は人家が建てられて他の屋敷と異なる所は無かった。然し或過去迄は墳丘が在った筈で、其時代に就いて少し考へて見やう。箕輪の城下町が現在の如く整頓したのは、慶長年間井伊氏の在城時代のことで、其頃は未だ墳丘も存在した筈である。何となれば第2図の地籍図に見る如く、当町の屋敷割は何れも主要道路に面して間口が狭く、奥行きの長い長方形をなしてゐるが、当古墳址の所在地と隣接増田氏の宅地とは、附近と同様の長方形の屋敷を二分した様に成つてゐる。而して本古墳址が発掘の結果、全く1093番土地の中央部に位して、隣接地に及んでゐないことは井伊氏の城下町屋敷割の時代に於いて墳丘を存していたため、此部分を除地として増田氏の屋敷のみ特に狭く取つたと見做すべきであろう。」として井伊氏以降の江戸時代中期頃に家屋の増築時に古墳を平夷したものと推測している。

増田銀次郎氏は大正14年頃その土地を譲り受け、昭和4年2月になって鶏舎を設けるために開墾を始めたところ円筒埴輪を掘り当て、「此地が何等かの遺跡であろうと考へ」2月23日の夕刻に箕輪史蹟保存会長下田恭介氏に報告がなされ、いよいよ事態が進み始めるのである。

(2)「組織的の発掘」調査

「当時筆者は箕輪城址実測のため、恰も同町に滞在中であつたので、翌24日早朝下田氏からの通知を受けるや現場に至り関係者と合議のうえ、組織的の発掘を試みる⁽⁶²⁾こととし」と述べる福島武雄は「見れば円筒は1本を掘り出し、3・4本が弧状をなして並んでゐた」という現状を適確に分析して、組織的発掘の重要性を下田と増田に力説したに違いない。福島⁽⁶³⁾の熱意にうたれた形で2人は「最初より開墾に従事し來つた増田氏方の人夫3名と、城址実測に従事中の3人、それに下田氏斡旋に依る箕輪史蹟保存会の人夫等」を充てて、発掘調査を援助する。

福島武雄の言う「組織的の発掘」について考えて見たい。管見の及ぶ限りでは「組織的の発掘」という語は、浜田耕作の『通論考古学』⁽⁶⁴⁾に窺える。「(前略) 豫め斯学の目的を以て、一定の計画の下に、組織的発掘を遂行すに及んで、愈々厳密なる意義における科学的方法に背かざるに至れり。(後略)」⁽⁶⁴⁾との文章にあたる時、この『通論考古学』が福島に多大な影響を与えたバイブルであることが理解される。彼の言う「組織的の発掘」とはまさに浜田耕作の言う「組織的発掘」の誠実なる実践の場ではなかったか。

また昭和2年に上梓された後藤守一の『日本考古学』も福島や岩沢に大きな影響を与えたと思

われる。『日本考古学』は後藤がその序に述べるように「しかるに逐次公にせられる斯学関係の論著・報告は微に入り細を盡してはゐるが、余りに部分的のもののみであって、此等の業績の概要を一般向きに録し、一冊の書以て全体を概見し得べきものに至っては、ここ十余年間に一部の編著⁽⁶⁵⁾だに之を見ることが出来なかった」との認識から、昭和初年までの日本考古学研究の成果を「一冊の書以て全体を概見し得べきもの」としてまとめたものである。その内容はバランス良く考古学に必須の事柄が解説されており、郷土史研究者にとっては絶好の座右の書であった。特に福島武雄にとっては、「考古学の研究は、先ず精確なる資料を聚成し、之を型式に従って分類し、各型式の相互の関係・共存等の事実より見てその年代を定め、ここにその型式変遷の迹を見て文化の推移を考へ、遺物の示す形の上より見て文化の所相を推すのを普通とする⁽⁶⁶⁾」と書く後藤守一の主張は、全く己の「科学趣味」に適っており、浜田耕作の『通論考古学』が思想としてのバイブルであるとすれば、後藤の「日本考古学」は行動原理としてのそれであったと考えられる。

福島武雄は「並列せる埴輪円筒が相互に上縁を接し弧状をなして配列するに於いては、当然古墳の一部ではあるまいかという考へが起こり、従って昨日まで掘り出した石の一部は石槨であったことも想像される。」と思考し、「そこで埴輪円筒の排列状態と石槨の想像位置から推して、略半径20尺の円形をなすものと測定して、発掘予定線を描し、円筒列の内側に沿ふて、円筒の底部以下2、3寸を露す程度に溝を穿って調査した⁽⁶⁷⁾。」と述べているように、「一定の方針計画の下に、丁寧細心発掘を行ふ」ことを決意し、埴輪配列の課題を解明しようとしたものと思われる。昭和4年当時の埴輪配列研究の現状と課題については、柴田常恵の『人類学雑誌』掲載の「上野国箕輪町上芝古墳⁽⁶⁸⁾」に詳しいのでそれを引用してみる。柴田によれば埴輪配列研究の現状は「円筒の全部に互って発掘的調査を試みる如きは、時間と労力とを要し、掛け隔たった土地に臨んでは容易に実行し難く、加ふるに資料の関係上から石槨の内部を主とするので、遂に外部の円筒に至っては多く簡略にせられて居った。偶々此部分にまで調査を及ぼさんとするも、相憎く完全に残存せずして之を行ふに適さざる場合もあり、遂に今日に至るまで此等の点が不十分ならしめた。」というものであった。そして課題は①「一古墳に於ける円筒の配列状態なり其数量なりということに為ると、円筒の全部に互って発掘調査を試みし事例乏しく、多くは比較的其配列状態の顕著な部分を擇んで調査を試み、其他は主要地点に就て発掘するに止め、以て推考する程度とて、未だ十分に知られて居ない。」、②「円筒は土止め用途に充てたものだとの説もあったが、実際に於いて斯く認めらるる状態にあるか。」、③「円筒の横に造れる孔は連接せる他の円筒に横木を貫くものといわれるが、之れも多く事例に於いては果たして然るや否や。」、④「同じく円筒と称すれど、大別して朝顔型に上部の開いた儘のものと、一旦細く括られて更に上部の開いたものとの2種あるが、此両者の関係は如何であるかという様な疑問もある」、⑤「更に円筒以外の人形や馬などの所謂樹物に至っては、円筒の列中に交じって存するか、それとも其列外に置かるべきものなるか」、⑥「埴輪樹物は特に研究資料として珍重せられ、何れも競ふて蒐集せらるる傾向あれども、調査者の手に依って発掘せられし場合殆ど存せず、何れも開墾等の土工に際し、其心得なき

人に依って発見さるるを常とするから、数量は割合に多しと雖も、其位置や方向に就ては今に至るも明白ならざるものがある。」の6点を挙げている。このような柴田の認識は福島武雄の調査に大きな示唆と影響を与えたであろう事は想像に難くない。

地質学に造詣の深い岩沢正作の参加を得「科学的組織的調査」の陣容を備えたとは言え、福島も岩沢も今回のような発掘調査は未経験であった。開墾の後の古墳の残骸を実測調査するのは勝手が随分と違ったものと思われる。保渡田八幡塚古墳の報告書の「第4節外周発掘の経過」の項の「発掘の結果は予想外の発見が相続き、為に3名は同村小学校の宿直室を宿舎に当て、毎夜鳩首熟議を凝らす必要に迫られた」と似たような手探りの状況が度々現出したに相違ない。そんな時宮崎県西都原古墳群の発掘調査を筆頭に数多くの古墳調査を手掛けた柴田常恵のアドバイスは、埴輪配列研究を念頭に置いて適確であった。例えば武雄の「此石塁が土留めの為に築かれた物とすれば、埴輪円筒の外の濠の内側にも、之に類した設備が有りはしないかとの、柴田先生の御意見に依て、凸出部の西北隅を北に掘り下げた所、別の石塁を発見することが出来た」との一文は、柴田の役割をたくましく描写している。蛇足だが柴田は上芝古墳趾の発掘調査に際し、この形式の古墳を「帆立て貝式古墳」と命名する。

岩沢正作の役割についても付言しておきたい。岩沢は『箕輪町新発見古墳の一部を埋没する火山屑層について』⁽⁷⁰⁾で「(前略)其の性質上破壊し易い埴輪円筒が築造当時の儘に樹立して居たという事は、此の古墳の一部を被覆してゐる火山屑層が、築造後余り多くの年月を経過せざる間に於て、比較的急速に堆積して埴輪円筒の大部分を埋没した為めであったと考へられる。若し此の被覆層が堆積しなかったなら、他の一般の例に洩れず転倒破壊の運命を止むなくせられ、今日迄保存せられなかったであろう。(中略)以上種々の事実を総合して、此の被覆層は火山灰・火山砂・火山礫等を組成分として、浮石屑・安山岩屑等の火山岩質から成るも、彼の勢多郡横野村大字滝沢に於ける、石器時代の住居址に見るやうに、火山の噴出物が直接に降下堆積して埋没したものでなく、上流地即ち榛名火山の山麓地帯を構成してゐた火山屑層の崩壊したものが、流水の作用によりてここに搬出せられて沈澱堆積した、所謂水成層であると想像する(後略)」と上芝古墳趾の被覆層を分析する。この岩沢の理解は、博覧強記な彼の学問レベルを示し、かつ大部の論考である「上毛地質学講話」に裏付けられたものである。そして今日の調査では常識となっている遺構や遺物と土層との関係を、附近の土層・埴輪円筒と土層・渥及葺石と土層・土層上より見たる古墳築造当時の地形として把握しようとした正作の努力は、福島の功績に勝るとも劣らないものであろう。

福島武雄は言う。彼は「我々は今回の発掘に依って、此古墳から幾多の新事実を学ぶ事が出来た。」⁽⁷¹⁾として、その主なものを12項目列記している。それは柴田常恵が埴輪研究の課題として挙げた項目を見事にクリアしているものであり、これは福島の「組織的発掘」の輝かしい成果であることは疑いない。以下12項目を列記して見る。

①埴輪の主体はやはり円筒であって、之が古墳を圍繞してゐる事。

②円筒の下節の辺までを土中に埋め、円孔は地上に出し、之に何か押し込んだ様な位置に在って一つの例外もない。

③円筒は上端の開いた所で相接してゐる事。

④十数本置きに異形の円筒を配置した事。

⑤埴輪円筒は土止めの為でなく、全くの装飾であつて土止めには石罫を使用した事。

⑥埴輪の人馬は円筒を以て凸出した一槨を造り、其内に安置した事。

⑦其配置から石人石馬との連絡が考えられる事。

⑧土止め石罫が数段に設けられ、特に必要な個處には特別に設けた事。

⑨円筒の外側に濠を設けた事。

⑩濠外に土手を設け、其上にも埴輪を置いた事。

⑪中央封土の形は円墳の形式の様であるが、其外周の円筒及び濠の形から見れば「帆立貝式」である事。

⑫帆立貝式の前凸出部が古墳の正面に当たり、其部分の埴輪の配置状態から見ても、祭壇を思はせる様な構造を示してゐる事。

かような上芝古墳発掘調査の成果は、当時の考古学界に多大な衝撃を与え、そして今日でも「この調査方法と新事実の発見は後の研究に大きな影響を与えた」⁽⁷²⁾と学史上の意義が強調されている。

昭和5年「考古学」誌上に掲載された谷木光之助『埴輪の装置状態』⁽⁷³⁾を同時代人の証言として本節の結びとしたい。「埴輪—円筒にもあれ樹物にもあれ—の墳における装置状態を実際について明らかにすることは、自ら埴輪そのものの用途並びにその存置の意義を解決する。このことは古墳の研究即ち内部設備の研究と相俟って他の一半をなす外部設備の研究に重要な意義と価値をもつ。其れにもかかわらず従来においてはその方面の研究が比較的軽視され、墳より取り出し出されて陳列箱に並べられた埴輪樹物—彼らが円筒より遙かに重視したところのもの—の服飾史的考察を以て、其の研究を終始した。幸いにして一兩年來の関東諸地方、特に両毛地方に於けるその組織的発掘の成果は、埴輪研究の中心を完全に置き換えてしまった。今や埴輪の研究は陳列箱を離れて『遺跡』に立ち帰り、其のうゑに立つて埋置状態をより詳らかにしようとしつつある。」

(3) 群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告第2輯(昭和7年3月)

上芝古墳址の発掘の主たる担当者である福島武雄は、前述の『箕輪町上芝古墳の遺跡発掘概報』⁽⁷⁴⁾の結言で「従つて本稿は単に発掘報告書たるに止めておいて、以後発掘される他の古墳の資料と共に(比較して)、詳細な数字的の報告書を作る考えである。」という見解を示し、「自分の定めた方針、に従つた科学的な(彼の言う)調査方法が堅持されている「詳細な数字的の報告書」を作るはずであった。

ところが「本報告は2編ともに福島委員(群馬県史蹟名勝天然紀念物調査会臨時委員)の原稿に基くものであるが、氏はその報告書執筆中昭和4年秋より病を得、ついにこれが完成を見ずし

て翌5年秋思いを残して逝かれた。まことに哀惜の極みである。依て爾来岩沢・相川両委員にその整理を嘱し、相川委員は遺物編を、岩沢委員はその他を担当して以て完成した次第である。」⁽⁷⁵⁾と
いうように、夭折した福島武雄の業は肝胆相照らす仲であった岩沢正作と相川龍雄の手になり、
昭和7年3月刊行の運びとなる。その分担の中身については「両編中其の結論は全く岩沢委員、
上芝古墳趾の遺物篇は殆ど相川委員の新たにもものせる所である。蓋し上芝古墳趾発掘遺物は皇室
博物館に於いて苦心整理の上夫々復元せられたが、福島委員は遂に之を視察調査する機なく且両
編を通じ、其の結論を稿するに至らずして病床につかれるに至ったに因る。然しながら各委員は
其発掘中は勿論、其の後に於いても細大となく克く協議研究を遂げてゐたので、故福島委員の意
志を全ふしたものとみて差支えはない。」とあり、該報告書が岩沢正作と福島武雄と相川龍雄とい
う戦前の群馬県を代表する考古学の知性が絶妙のチームワークで織り成した賜物であることが理
解される。そして「上芝・八幡塚両古墳の調査法と報告書は、当時の日本の考古学研究の中にお
いても、極めてすぐれたものであり、古墳研究の先進地域であった近畿地方の研究者をして驚嘆
せしめたほどであった。⁽⁷⁶⁾」との指摘はその学問レベルの高さを物語っている。

この報告書のひとつの特徴は、本文44頁の中で実に10頁もの分量を土層篇に費やしていること
である。ここに融通無礙な博物学者岩沢正作の面目が躍如としている。まさに岩沢の4節からな
る科学的考察に裏打ちされた土層篇は、上芝古墳趾の調査報告書の白眉の一つといえる。確実に
分層された墳丘の断面実測図は精度の高いもので、土層と円筒埴輪・土塁・葺石・濠との関係を
明瞭に示している。

また墳丘平面図（全体図・部分図）は目的を着実にとらえた表現方法が取られ、円筒埴輪と形
象埴輪の出土位置が明確に示されており、現在でもそのありようが復元的に利用されるレベルを
備えている。くわえて当時としては貴重な写真も確実な目的意識の下で撮影されており、上芝古
墳趾を研究するものにとってのヴィジュアルな重要資料となっている。唯惜しむらくは遺物図版
の少なさである。唯一掲載されているのは、馬の埴輪のスケッチ風のもののみで、あの石棺や石
室の正確な実測図をものした福島武雄ありせばの感の深いものがある。

しかしながら、地方の郷土史研究者の水準をはるかに凌駕した報告書であることは明らかで、
福島の「組織的の発掘」は、己の「科学趣味」を十分満足させるものであったに違いない。

5. 結 語

森本六爾は『埴輪研究史略』⁽⁷⁷⁾（昭和5年）で、「（前略）昭和4年度前半期における柴田氏等を
中心とした両毛地方の埴輪の発掘は、その組織的な調査と相俟って、その墳に於ける配列の明瞭
にして疑うべからざる實際を示したが、それは種々の意味で埴輪の研究を飛躍せしめている。か
くして今や吾々は埴輪研究の基礎を再び遺跡に置こうとする。取り出された埴輪そのもののみが、
埴輪を究明する全部ではないことが明らかにされた。既に埴輪の研究にも新興の氣運の台頭を否
定しがたいことを記して、この研究史略の筆を擱する。」として、上芝古墳趾の発掘に繋がる一連

の発掘調査の埴輪研究に与えた衝撃の強さと期待を表明している。それは上芝古墳址発掘調査の
大いなる波紋でもあった。

『上毛及上毛人』146号の『保渡田八幡塚外囲発掘概況』⁽⁷⁸⁾によれば、「曩に箕輪町上芝古墳が発掘
せられ、その形式の珍しいことが発表せられると、観覧者の数は日々数百名を超えた。隣村上郊
村大字井出区高橋半三郎氏等も亦往訪観覧せられたが、その発見した埴輪円筒は氏が両3年前八
幡塚の東南20歩の位置にある持地内から発見せられたものに比して甚だ小さきこと、尚圍中平坦
地の地下2,3尺の處に存在すること等を審しく考えられて福島調査委員に相談せられた。」とい
う思わぬ結果を生み出した。そしてこのことが発端となって、上郊村有志の援助や青年団の労力
奉仕を引き出し、ひいては県村共同作業に発展していくのである。

水野正好氏の著名な「埴輪芸能論」の基となった保渡田八幡塚古墳の発掘調査は、かような経
緯から実に上芝古墳址発掘の副産物とも言い得るが、福島、岩沢に新たに相川龍雄の参加を得て
さらに細密で大掛かりな発掘調査となっていく。

さらに同年12月後藤守一氏の行った赤堀茶臼山古墳⁽⁷⁹⁾の発掘も、上芝古墳址の波紋の一つとして
理解出来る。「上毛及上毛人」154号の「茶臼山古墳に就いて」によれば、耳目を集めた上芝古墳
址や保渡田八幡塚古墳発掘の後、「斯くの如く上代文化の中心と称せらるる本県の古墳について、
完全なる学術的調査を遂行せんとし、博物館においては発掘に先立ち、後藤監査官及び内藤政光
氏の両氏は12月12日来県、社寺課の吉沢兄並びに相川、福島両調査委員の案内にて、群馬・佐波
両郡を視察し漸く茶臼山を選定せり。」⁽⁸⁰⁾とかなり慎重な態度で、成果の期待出来る赤堀茶臼山古
墳を選んでいる。赤堀茶臼山古墳の調査は帝室博物館が手掛けた最初の発掘調査であった。この
調査で後藤守一は昭和2年の自著『日本考古学』の実践を行う結果となり、報告書『上野国佐波
郡赤堀村今井茶臼山古墳』⁽⁸¹⁾でも埴輪家の配置復元や聚成で大きな成果を収めている。

かつて豊国覚堂が『大正9年年頭に際して』⁽⁸²⁾（『上毛及上毛人』37号）で、「（前略）古墳並びに
其埋蔵物の保存之を学問的に期待して、秩序ある研究を遂げ、而して其結果を天下に公表するこ
と（後略）」として、群馬県に於ける学問的に秩序ある古墳研究の必要性を力説したそのことが現
実のものとなり、「天下に公表」されて古墳王国群馬の名を全国に轟かしたのであった。

それらの記念すべき発掘調査はすべて昭和4年に集中しており、あたかも胚胎していたものが
上芝古墳址の発掘調査を契機として吐き出された感がある。

大正12年末の段階でも群馬県では、依然「本縣の様に考古学的調査が不十分な所では」と福島
武雄にいわしむる状態が続いていたにもかかわらず、福島⁽⁸³⁾の嘆きとは別に、「昭和3年11月現在郷
土史研究者名簿」の項でも触れたように、豊国覚堂率いる上毛郷土史研究会は、大正末年には「会
員数は設立以後1000名以上にのぼるまで拡大し、その範囲も全県下におよんでいった。当時これ
だけの規模をもつ郷土研究組織は全国的にみてもきわめて希なことであり、県内における郷土意
識の一端をうかがい知ることができる。」⁽⁸⁴⁾という力量を既に備えており、群馬県内をほぼ網羅した
郷土史研究者のネットワークが完成していた。また大正末年以来岩沢正作や福島武雄は自然科学

畑の方法論をもとに、中央の考古学界の研究成果に鋭敏な反応を示し、かつ中央の考古学者との交流を深める中で、「学術的色彩の強い論考」を『上毛及上毛人』誌上に掲載している。

これまで述べてきたように、「上芝古墳趾」の発掘調査はただ単に埴輪配列研究に資する成果を挙げた古墳趾の発掘ではない。その背後には、それらの現象を必然たらしめる人間たちの思想的営為や地域に蓄積された知的遺産が存在している。それは郷土史研究ネットワークを底辺で支え、郷土史研究に懸ける人々の熱き思いでもあり、「郷土本位」の思想の豊国覚堂と「脚任せの努力主義」者岩沢正作と「科学趣味」を標榜する福島武雄の織り成した壮大なタペストリであった。

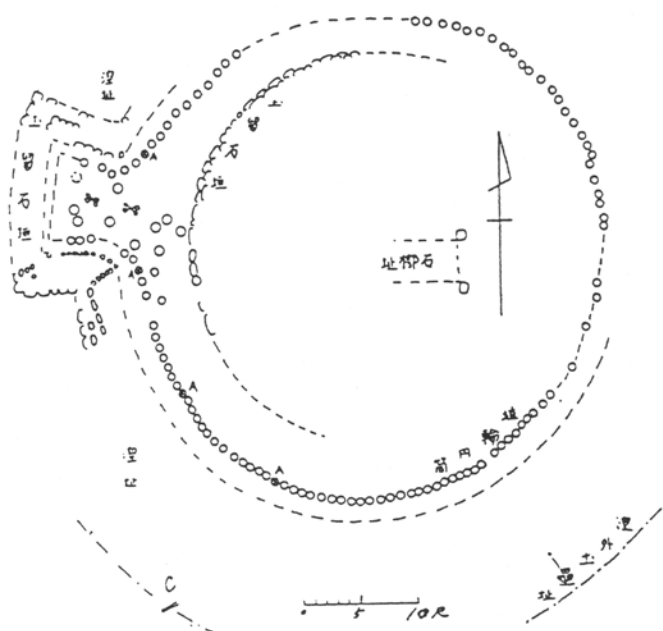
昭和4年の上芝古墳趾・保渡田八幡塚古墳の発掘調査以後、岩沢は上毛郷土史研究会の郷土史志向に物足りず毛野研究会を組織し、翌年福島は万感の思いを残して夭折し、覚堂はさらに郷土色を増し大政翼賛的傾向を強めて行くのは三者の思想的経緯を顧みるとあながち偶然ではないであろう。このように見てくると、3つの異なった光源から放たれた3条の光（豊国・岩沢・福島）が昭和4年上芝古墳趾と保渡田八幡塚古墳の発掘調査に収斂し、再び離れていかざるを得なかったところに『上毛郷土史研究会』の限界があったといえる。そしてそれは戦前の日本の郷土史研究の通弊と同根であったと思量される。

追 記

本稿は「昭和初年群馬県における郷土史研究者の一動向」と題して、昭和4年の上芝古墳趾の発掘調査を定点に、豊国覚堂をはじめとする郷土史研究者の動向を描出しようと意図したものである。しかしながら筆を進めれば進めるほど疑問点・未解決点が山積みされ、迷路にはまりこんでしまった。例えば岩沢正作という個人に接近しようとしても、人間総体は複雑多岐で語り尽くすには研究も紙幅も足りないづくめであることを改めて感じた。それは上芝古墳趾についても同様である。研究ノートとしてほとんど思いつくままの総論的な論考となってしまったが、今後は「昭和初年群馬県における郷土史研究の状況」のより厳密な意味での各論を考えて行くことによって、本稿の欠陥を補完していきたい。

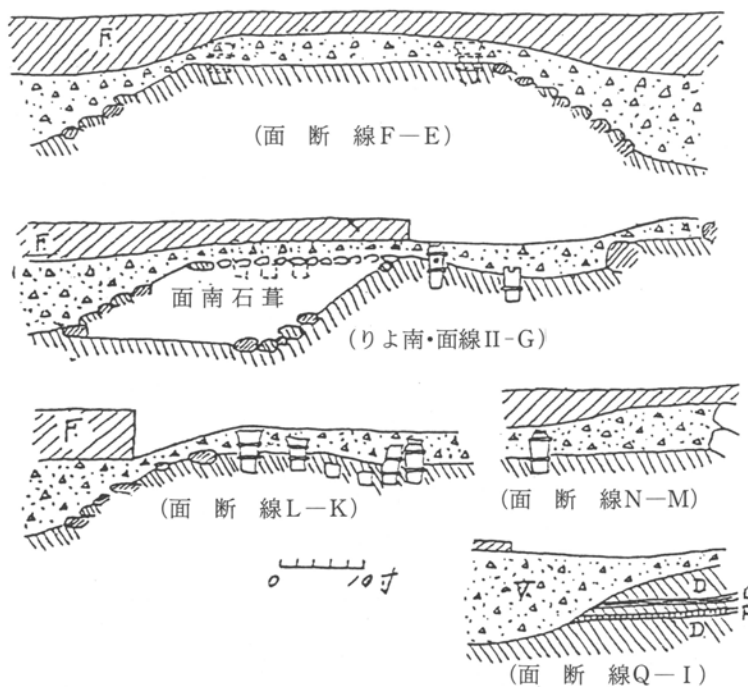
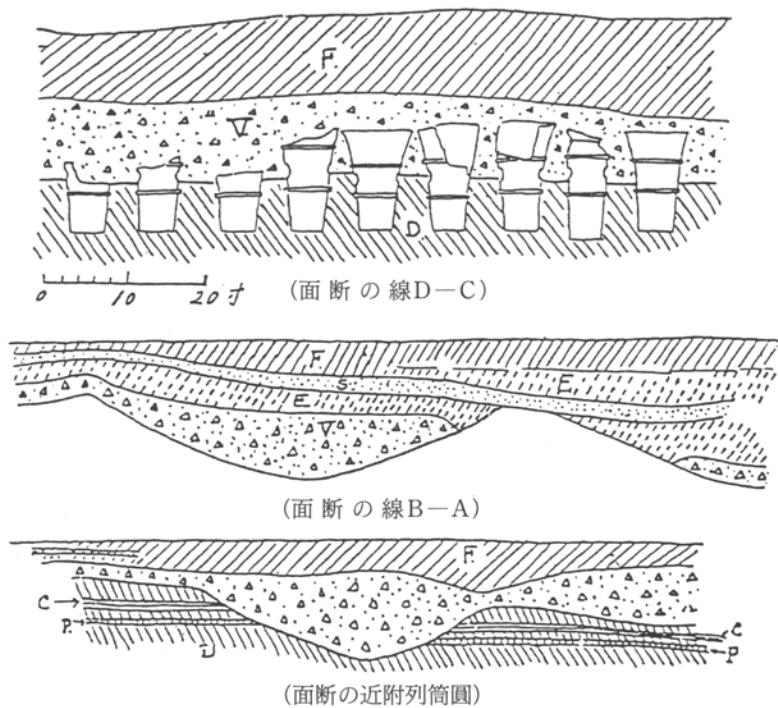
（擱筆 1192. 6. 30）

図版第一 上芝古墳跡発掘原状実測図



図版第二 上芝古墳跡形象埴輪発見位置実測図





郷土史研究関係略年表（昭和20年まで）

西暦	和 暦	郷 土 史 研 究 関 係 記 事	考 古 関 連 記 事
1792年	寛政4年	伊勢崎藩家老関重嶷「発墳暦」「古器図説」を著す。	
1811年	文化8年	「上毛上野古墓記」の著者吉田芝浜没。	
1819年	文政2年	11月群馬郡総社光厳寺裏山の古墳が発掘される。(天野政徳随筆)	
1865年	慶応元年	豊国覚堂生まれる。(1865～1954)	
1866年	2年	相川之賀生まれる。(1866～1949)	
1876年	明治9年	岩澤正作生まれる。(1876～1944)	
1877年	10年	柴田常恵生まれる。(1877～1954)	
1878年	11年	3月大室前二子古墳が村民により発掘される。 アーネスト・サトウが前二子古墳石室を調査し、日本アジア協会誌に 報文を発表している。	
1888年	21年	後藤守一生まれる。(1888～1960)	
1898年	31年	福島武雄生まれる。(1898～1930)	
1902年	35年	中谷治宇二郎生まれる。(1902～1936)	
1904年	37年	尾崎喜左雄生まれる。(1904～1978)	日露戦争
1906年	39年	柴田常恵が諏訪神社古墳を発掘する。	
1907年	40年	柴田常恵が本郷埴輪窯跡を発見する。相川龍雄が生まれる。 (1907～1946)	
1909年	42年	群馬県が訓令を発し、各市町村の学校と役場が協力して郷土誌を編纂 し、学校と役場に備え付けるようにした。	
1913年	大正2年	豊国覚堂が高崎において「上毛郷土史研究会」を創立する。	大正元年宮崎県西都原古墳群発 掘開始 第1次世界大戦
1914年	3年	「上毛及上毛人」を創刊するが3号で休刊。(豊国覚堂)	
1916年	5年	豊国覚堂が前橋に転居して「上毛及上毛人」を復刊する。	
1917年	6年	「日本石器時代人民遺物発見地名表」4版刊行 柴田常恵。	
1919年	8年	内務省令「史蹟名勝天然記念物保存法」が制定される。金山瓦窯跡が発 見される(松田 金貫) 総社史蹟名勝天然記念物保存協会創立(福島兄弟)。	
1921年	10年	群馬県史蹟名勝天然記念物調査委員を25名に委嘱する。(豊国覚堂、相 川之賀、福島博、岩沢正作等) 笠懸村古代瓦窯跡を発見する(岩沢正作)。群馬県史編纂に着手。	
1922年	11年	この時期から各地の史跡調査が盛んに行われる。7月群馬郡誌編纂開 始。	浜田耕作「通論考古学」
1923年	12年	郡制が廃止される。3月考古同志の州外見学(豊国、相川、岩沢、福島 等)。 10月上毛考古会第2回例会(総社町光厳寺)。11月古前橋研究会第3回実 地踏査。	9月関東大震災
1924年	13年	3月第4回上毛考古会春季大会(伊勢崎公園内華蔵寺)。 11月第6回上毛考古会(藤岡浅美邸)。群馬郡誌が上梓される。11月勢 多郡誌資料展覧会開催。	
1925年	14年	1月上毛考古会第7回大会(高崎大信寺)。3月金山史蹟調査会を創立。 4月第8回上毛考古会(大間々)。 10月第1回郷土資料展覧会(前橋図書館)。	
1926年	15年	1月第10回上毛考古会(前橋臨江閣)。	
	昭和元年		
1927年	2年	4月高崎史蹟保存会創立される。4月内務省指定史蹟告示(大室前二子 古墳等)、5月高崎市史頒布。 8月伊勢崎国民講座開催。8月大間々三山閣で考古会開催。8月箕輪 史蹟保存会設立。 10月上毛考古会第13回大会(世良田長楽寺)。	後藤守一「日本考古学」
1928年	3年	3月群馬自由大学考古学講座開講。多野郡誌成る。新田郡史出版。箕 輪町史刊行(箕輪史蹟保存会)。 10月吾妻郡歴史展覧会開催。甘楽郡史成る。桐生地方史成る(岡部赤 峯)。「佐波の古蹟」(相川龍雄)。	

1929年	4年	<p>1 月勢多考古学研究会発会。併せて講演会。展覧会開催(大胡町)。1 月国史講座開催(奉公会主催)。</p> <p>2 月吾妻歴史研究会成る(中之条町)。2 月箕輪町上芝古墳の発掘調査。</p> <p>4 月保渡田八幡塚古墳の発掘調査</p> <p>5 月保渡田八幡塚古墳出土品の縦覧と講演会を行う(上郊小)。勢多郡誌編纂決定。</p> <p>6 月史蹟名勝天然記念物調査会成る。7 月新里史蹟名勝保存会創立。</p> <p>9 月吾妻郡誌刊行。</p> <p>岩澤正作の「毛野研究会」が成立。11月上毛考古会第17回秋季大会(箕輪町)。「郷土読本」刊行さる。</p> <p>12月赤堀茶白山古墳の発掘調査。</p>	
1930年	5年	<p>2 月群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告第一輯刊行。4 月上毛考古会第18回例会(群馬郡国府小学校)</p> <p>4 月国府郷土研究会創設。利根考古会成立。9 月福島武雄が亡くなる。</p>	1 月東京考古学会創立。
1931年	6年	<p>岩澤正作「毛野」創刊。群馬会館落成記念郷土資料展覧会。4 月第19回上毛考古会(藤岡・浅見宅十峯閣)。</p>	
1932年	7年	「群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告第2輯」刊行。6 月福島武雄慰霊祭。	
1933年	8年	「白石稲荷山古墳の発掘調査」(後藤守一・相川龍雄)。12月『上毛及上毛人』200号記念。	「赤堀茶白山古墳発掘報告書」刊行
1934年	9年	6 月「毛野時報」創刊。11月鹵簿誤導事件。	
1935年	10年	<p>群馬県全域古墳調査。3 月黒板博士を招いて史蹟座談会。上毛考古会を群馬県郷土会と改称。</p> <p>10月両毛郷土研究家聯合大会。</p>	中谷治宇二郎「日本先史学序史」
1936年	11年	<p>4 月「上毛文化」創刊。6 月群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告「多野郡平井村白石稲荷山古墳」刊行。</p> <p>尾崎喜左雄京都大学研究室より招かれる。3 月22日中谷治宇二郎大分県湯布院にて道山。</p>	ミネルヴァ論争
1937年	12年	2 月文部省保存協会の西上州見学。3 月柴崎蟹沢古墳の調査(相川龍雄)。	
1938年	13年	「上毛古墳総覧」(「群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告」第5輯)刊行。	
1939年	14年	「山田郡誌」編纂なる。	山内清男「日本遠古之文化」
1940年	15年		
1941年	16年	11月天神山古墳史蹟指定奉告祭。豊国覚堂が大政翼賛会群馬支部文化委員になる。	12月太平洋戦争開始。
1942年	17年	『上毛及上毛人』297号で最終刊。	
1943年	18年	藤岡本郷埴輪窯跡の調査(尾崎喜左雄)。	
1944年	19年	6 月21日岩沢正作没。(大胡町で講演直後)	
1945年	20年	8 月5 日原田龍雄前橋空襲で爆死。	8 月終戦

昭和3年11月現在 郷土史研究者人数一覧

■10人 ●5人 ●1人

番号	県名	研究者数	研究団体と発行機関紙
01	北海道	●●●● 04	
02	青森県	■●●● 13	3 団体(津軽史談会・七戸史跡調査会・八戸史談会)
03	岩手県	●● 06	1 団体(岩手史談会)
04	宮城県	■ 10	
05	秋田県	●●● 07	2 団体(秋田史談会・角館史考会)
06	山形県	●●●● 08	
07	福島県	■ 20	
08	茨城県	■●● 12	
09	栃木県	●●●● 04	
10	群馬県	■●●●●●●●●● 59	6 団体(上毛郷土史・古前橋・桐生郷土史研究会・総社史跡保存会・上毛・東毛考古会)
11	埼玉県	■●●●● 17	1 団体(歴史研究会)
12	千葉県	■●●●● 14	
13	東京都	■ 10	
14	神奈川県	■●● 16	
15	新潟県	■●● 21	
16	富山県	●●●● 04	
17	石川県	■ 10	2 団体(加越能史談会・加越能支部史談会)
18	福井県	■● 11	
19	山梨県	●●● 03	
20	長野県	■●●● 13	
21	岐阜県	■●●●● 14	2 団体(大垣史談会・飛騨史談会)「飛騨史談」
22	静岡県	■●●● 13	4 体(遠州郷土史料・静岡県史料研究会・静岡県考古学同志会・静岡県史跡調査会)
23	愛知県	●●● 12	2 団体(名古屋史談会・名古屋温故会・岡崎趣味会)「名古屋史談会誌」
24	三重県	●●●●● 09	
25	滋賀県	■●●● 13	
26	京都府	■●●● 17	
27	大阪府	■●●● 17	2 団体(大阪史談会・池田史談会)
28	兵庫県	■●●●● 23	
29	奈良県	■● 11	
30	和歌山県	■●● 25	
31	鳥取県	●●●● 08	
32	島根県	●●●●● 09	2 団体(島根県史編纂係・出雲風土記研究会)
33	岡山県	■●●● 22	1 団体(温故会)
34	広島県	■●●●● 27	
35	山口県	■●●●● 18	
36	徳島県	■●●●●● 33	
37	香川県	●●●● 04	2 団体(丸亀史談会・鎌田共済会郷土館)
38	愛媛県	■●● 30	7 団体(伊予・今治・西宇和・大洲・宇和島・府中史談会・伊予史談会周桑支部)
39	高知県	■●●● 13	2 団体(土佐史談会・南国史談会)
40	福岡県	■●●●● 14	
41	佐賀県	●● 06	1 団体(肥前史談会)
42	長崎県	● 05	
43	熊本県	■●● 12	1 団体(天草史談会)
44	大分県	■●●● 13	
45	宮崎県	●●●● 08	
46	鹿児島県	●●●●● 09	1 団体(郷土資料調査委員会)
47	沖縄県	●●● 03	

昭和3年11月現在

群馬県郷土史研究者名簿

番号	氏 名	住 所	備 考
01	豊 国 義 孝	前橋市南曲輪町19	前館長 司書。古前橋研究会。「雲外余稿」
02	桜井菊次郎	前橋市立図書館	
03	佐藤錠太郎	前橋市立図書館	
04	中島吉太郎	田中町	群馬県史蹟係主任 桐生高等学校長 前橋高等女学校教諭
05	大図軍之丞	紅雲町	
06	八 木 昌 平	国領町	
07	飛 沢 勇 造	紅雲町	勢多郡誌編纂主任 桐生高等学校。「上野人物志」
08	江 原 三 郎	北曲輪町38	
09	原 田 龍 雄	神明町3	
10	岡 部 福 蔵	桐生市今泉	金山図書館司書
11	田村栄次郎	本町	
12	真尾源一郎	本町一丁目	
13	前 原 寛 二	山田郡広沢村	郷土史家。「高崎案内」を発行(1910)。 郷土史家。「高崎市史」上下巻編纂。 郷土史家。「群馬郡誌」編纂(T14年)。
14	飯塚恵一郎	広沢村	
15	鈴 木	毛里田村	
16	岩 沢 正 作	大間々町	郷土史家。「高崎案内」を発行(1910)。 郷土史家。「高崎市史」上下巻編纂。 郷土史家。「群馬郡誌」編纂(T14年)。
17	長 島 織 吉	境野村	
18	松崎傳次郎	新田郡太田町	
19	石 原 春 吉	笠懸村	郷土史家。「高崎案内」を発行(1910)。 郷土史家。「高崎市史」上下巻編纂。 郷土史家。「群馬郡誌」編纂(T14年)。
20	内 田 英 雄	太田町	
21	富 岡 牛 松	太田町	
22	長山健次郎	綿打村	郷土史家。「高崎案内」を発行(1910)。 郷土史家。「高崎市史」上下巻編纂。 郷土史家。「群馬郡誌」編纂(T14年)。
23	岡部駒次郎	強戸村	
24	波沢嘉津間	世良田村	
25	奥 山 陽	笠懸村	郷土史家。「高崎案内」を発行(1910)。 郷土史家。「高崎市史」上下巻編纂。 郷土史家。「群馬郡誌」編纂(T14年)。
26	早川恵次郎	高崎市砂賀町	
27	山 内 留 弥	下横町4	
28	丹 下 鎮 象	通町大信寺内	郷土史家。「高崎案内」を発行(1910)。 郷土史家。「高崎市史」上下巻編纂。 郷土史家。「群馬郡誌」編纂(T14年)。
29	小野善兵衛	利根郡桃野村月夜野	
30	秋山吉次郎	桃野村	
31	小 林 徳 助	川場村	郷土史家。「高崎案内」を発行(1910)。 郷土史家。「高崎市史」上下巻編纂。 郷土史家。「群馬郡誌」編纂(T14年)。
32	鶴渕伊勢松	白沢村	
33	松井勝三郎	白沢村	
34	中 沢 広 勝	佐波郡境町	郷土史家。「高崎案内」を発行(1910)。 郷土史家。「高崎市史」上下巻編纂。 郷土史家。「群馬郡誌」編纂(T14年)。
35	相 川 之 賀	伊勢崎町	
36	石川国太郎	宮郷村	
37	福 島 甫	茂呂村	郷土史家。「高崎案内」を発行(1910)。 郷土史家。「高崎市史」上下巻編纂。 郷土史家。「群馬郡誌」編纂(T14年)。
38	内山留一郎	伊勢崎町	
39	福 島 博	群馬郡総社町	
40	福 島 武 雄	総社町	郷土史家。「高崎案内」を発行(1910)。 郷土史家。「高崎市史」上下巻編纂。 郷土史家。「群馬郡誌」編纂(T14年)。
41	関 亀 齡	京ヶ島村	
42	磯 田 峯 城	元総社村	
43	依 田 省 三	室田町榛名山	郷土史家。「高崎案内」を発行(1910)。 郷土史家。「高崎市史」上下巻編纂。 郷土史家。「群馬郡誌」編纂(T14年)。
44	牧 震太郎	金古町	
45	堀 口 薫 治	多野郡入野村	
46	浅見作兵衛	藤岡町	郷土史家。「高崎案内」を発行(1910)。 郷土史家。「高崎市史」上下巻編纂。 郷土史家。「群馬郡誌」編纂(T14年)。
47	松 田 鑽	日野村	
48	富田茂三郎	平井村	
49	船 戸 祐 研	勢多郡新里村	郷土史家。「高崎案内」を発行(1910)。 郷土史家。「高崎市史」上下巻編纂。 郷土史家。「群馬郡誌」編纂(T14年)。
50	蓮 沼 吉 衛	邑楽郡館林町	
51	田中善次郎	碓氷郡安中町	
52	中 里 重 作	後閑村	郷土史家。「高崎案内」を発行(1910)。 郷土史家。「高崎市史」上下巻編纂。 郷土史家。「群馬郡誌」編纂(T14年)。

53	中島悦次	東京市外田端491	
53	高橋城司	下落合村	
54	諸田八百七	杉並町高円寺 374	
55	樋口千代松	名古屋市図書館	
56	堀田璋左右	横浜市役所	
57	戸田桑次郎	樺太庁中学	
58	中西新太郎	埼玉県浦和町	
A	上毛郷土史研究会	前橋市南曲輪町	「上毛及び上毛人」
B	総社史跡名 勝天然記念 物保存会	群馬郡総社町	
C	古前橋研究会	前橋市立図書館	
D	上毛考古会	前橋市	
E	桐生郷土史研究会	桐生市今泉	
F	東毛考古会	新田郡太田町	
G	箕輪史跡保 存会		下田恭介・長島
H	勢多考古学研究会		大島・高橋
I	毛野研究会		
J	新里史跡保存会		
K	上郊史跡保 存会		

豊国覚堂略年譜

西暦	和暦	記	事	備考
1865年	慶応元年	多野郡日野村興春寺の住職田川義水の長男として生まれる。		
1879年	明治12年	勢多郡大胡町大字堀越の長善寺の豊国洞伝の養子となる。		
1880年	13年	前橋市の龍海院の群馬県曹洞宗専門学校に学び、明治18年に卒業する。		
1886年	19年	県知事の認可を経て寺内に「済美塾」を開く。住職になる。		
1888年	21年	東京の仏教布教師講習会で大内青巒を知り、同師主催の「江湖新聞」の記者となる。		
1896年	29年	「上州新報」の記者となる。		このころ「上州人物志」を編集・刊行する。 「高崎繁盛記」「前橋繁盛記」相次いで刊行。
1905年	38年	「上野日々新聞」を主筆する。		
1913年	大正2年	高崎において「上毛郷土史研究会」を創立、主宰する。		
1914年	3年	月刊志「上毛及上毛人」を創刊するが3号で休刊におこまれる。		
1916年	5年	前橋に移り再び「上毛及上毛人」を復刊する。		
1921年	10年	群馬県史跡名勝天然記念物調査委員に委嘱される。		「発掘古鏡10面」「上毛及上毛人」53
1922年	11年	「本県空前の大発見・朝鮮式土器の製造窯跡」「上毛及上毛人」60		「笠懸村史蹟名勝其他見聞雑記」「上毛及上毛人」
1923年	12年	2月福島武雄等多野郡の史跡調査を行う。		「北金井の埴輪窯跡を見る」「上毛及上毛人」75
		9月東京の考古学会と上毛考古会を共催する。		「世の先進者、特に教育家諸君に激す」75
1925年	14年	「東国分の古瓦窯跡を捜る」「上毛及上毛人」97		
1926年	昭和1年	「本県石器時代の本場勢多郡横野村及其附近」「上毛及上毛人」108		
1927年	2年	「大間々三山閣考古会」「上毛及上毛人」125		「吾妻郡の先史遺物瞥見記」「上毛及上毛人」126
1929年	4年	「史蹟名勝天然記念物調査会成立に就いて」「上毛及上毛人」147		

1930年	5年	「帝室博物館の埴輪特別展を観る」『上毛及上毛人』163	「考古会界も秋が収穫時」『上毛及上毛人』235
1932年	7年	「白石の稲荷山古墳紀行」『上毛及上毛人』199	
1936年	11年	文部大臣より表彰される。	
1941年	16年	大政翼賛会群馬支部文化委員になる。 「郷土史研究事業に就いての吾等の心境」『上毛及上毛人』289	
1942年	17年	1月をもって経営権を大陸講談社に譲り、『上毛及上毛人』は終刊となる。	
1949年	24年	「上毛百人一首」その他を出版する。	
1950年	25年	第1回岡崎文化賞を受賞する。	
1954年	29年	2月4日89歳で亡くなる。	

岩沢正作略年譜

西暦	和 暦	郷 土 史 研 究 関 係 記 事	備 考
1876年	明治9年	6月横浜市港区川和町に生まれる。	その後理科大学専科卒業の寺崎留吉について博物学を専修する。
1889年	22年	3月村立川和小学校卒業。4月東京の松籟義塾に入る(明治25年3月まで)。	
1892年	25年	4月有りん義塾(明治27年4月まで)。	
1894年	27年	東京の豊永小学校に奉職する。	この間あちこちで数学、理科、博物、英語、農業、生理衛生の講習を受ける。
1895年	28年	5月小学校本科準教員の資格を取る。	
1896年	29年	小学校本科正教員の資格を取る。	
1897年	30年	この年訓導となる。	
1898年	31年	豊永小学校を退職する。国民英学会で英語を学ぶ(明治31年12月から33年7月まで)。 泰東小学校や東京数学院で博物科教授を勤める(明治31年12月～34年7月まで)。 12月秩父地方地質巡検旅行をする。	
1899年	32年	中学教員検定のための、1月農事講習, 8月動物学講習終了。	このころ地質標本の収集で各地を歩き回る。 前橋中学では博物、生理、衛生を担当した。 教え子に土屋文明等がいる。
1901年	34年	10月四国の高松中学の教諭心得を命じられる。(月給35円)	
1902年	35年	9月校長岡元輔の引きで前橋中学校教諭となる(月給40円)。須永キンと結婚し紅雲町に住む。	
1905年	38年	4月高崎中学校へ転任(月給45円)。	担当科目は博物、農業、漢文
1907年	40年	前橋の共進会に地質標本を出品。	
1912年	45年	3月7年間奉職した高崎中学校を退職。	
	大正元年	7月戸籍を移して群馬県人となり大間々の住人となる。	
1914年	3年	1月大間々共立普通学校教諭となる。(月給80円)	
1916年	5年	「赤城山」刊行。	
1917年	6年	「妙義山」刊行。	
1921年	10年	群馬県史蹟名勝天然記念物調査委員に覚堂、之賀等とともに委嘱される。5月笠懸村古代瓦窯址を発見。	
1922年	11年	「赤城山から庚申山」刊行。8～12月山田郡南部の史蹟調査を頻繁に実施する。	
1923年	12年	3月考古同士の州外見学で足利を訪れる。(福島兄弟、相川之賀、豊国覚堂等) 4月藤岡・海老瀬貝塚の視察。9月勢多郡月田の古墳群をたずねる。	
1924年	13年	1～12月勢多郡の史蹟調査を行う。8月国立公園予定地の視察。9月後藤守一等の群馬研究旅行の案内	覚堂、武雄、正作
1925年	14年	4月上毛考古会総会を大間々町共立普通学校にて開催。同時に三山閣臨時展覧会も実施。 11月赤城山の大量増水問題で環境保護を訴える。	
1926年	15年	6月多野郡第三学事会で岩石・鉱物の大要を講義する。6月横野村溝	

	昭和元年	呂木周辺の踏査(覚堂, 原田龍雄と)	
1927年	2年	11月から12月下旬まで感冒で蟄伏。 1月～6月群馬各地に史蹟調査にでかける。8月中谷治字二郎のために三山閣臨時陳列会を開く。	
1928年	3年	1月母毒病に冒され呻吟する。3月前橋図書館で自由大学講座開講, 岩沢は「石器時代の上毛に就て」 9月朝香宮殿下のお供で赤城山に登る。	
1929年	4年	2月24日～3月9日上芝古墳址の調査(福島武雄。岩沢正作)。 4月25日～5月10日保渡田八幡塚古墳調査(福島武雄、岩沢正作、相川龍雄)。 6月「毛野研究会」設立。7月史蹟名勝天然紀念物調査新委員の初会議。	
1930年	5年	4月上毛考古会第18回例会に参加。6～7月各地を踏査。	
1931年	6年	郷土誌「毛野」創刊。群馬会館落成記念郷土資料展覧会の第2部の企画をする。 4月藤岡十峯閣での第19回上毛考古会総会に参加。6月群馬県地理学会創立総会に参加。 6月上毛新聞主催の「山を愛する座談会」で赤城山保護を訴える。10月足利考古会第百回祝賀会に参加。	「群馬県下に於ける弥生式関係遺物」(考古学1・5・6 弥生式号)
1932年	7年	上芝古墳址・保渡田八幡塚古墳の調査報告書の整理を終える。(故福島武雄に代わって)	「群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告」第2輯刊行。
1933年	8年	4月新里村史蹟保存会総会に顧問として参加。	
1934年	9年	3月文部省史蹟名勝天然紀念物保存会第77回見学旅行団の案内役をつとめる。6月「毛野時報」創刊。 11月特別演習の際, 昭和天皇に御進講する。演題「群馬の陸産品について」	函簿誤導事件。
1935年	10年	3月黒板勝美博士を招いての史蹟座談会に参加。 1936年～1938年各地の講演会, 見学会を精力的に回る。	群馬県全域古墳調査。
1939年	14年	「山田郡誌」の編纂。	
1940年	15年	県内各地の講演会, 見学会に招かれる。	
1941年	16年	3月文部省史蹟名勝天然紀念物調査会及び日本郷土会合同の大島見学会に参加。 5月日本古代文化学会支部結成総会に参加。	
1942年	17年	各地の名鐘を訪れ銘文の拓本を取って回る(戦争による供出に備えて)	
1943年	18年	9月群馬県医師協会「食用野生植物座談会」で講話。	
1944年	19年	6月21日大胡町の赤城青年道場洗心亭での講演直後不帰の客となる。	大間々光栄寺に葬られ, 戒名は「山岳院涉蒼四拙居士」。

福島武雄略年譜

西暦	和 暦	郷 土 史 研 究 関 係 記 事	備 考
1898年	明治31年	10月17日群馬郡総社町大字高井に生まれる。	
1903年	36年	このころ総社小学校入学。	
1909年	42年	3月総社小学校卒業。4月前橋中学校入学。	このころ農村人家の配置や構造を調べる。
1911年	44年	東京の私立東京中学校入学。	
1916年	大正5年	3月東京私立東京中学校卒業。早稲田大学高等予科を経て同大学理工科採鉱冶金科に入る。	
1917年	6年	9月父福島康州没。	
1918年	7年		「元旦の手記」を書いて決意する。
1921年	10年	『上毛及上毛人』53号に「上野国国分僧寺址考」「上野国国分僧寺の古瓦」 「総社元総社国府史蹟名勝案内」「日枝神社境内の大礎石」を発表。	
1922年	11年	「再び国分僧寺址について」(『上毛及上毛人』64号)	
1923年	12年	2月明治村南下の一小古墳を見学する。多野郡史蹟踏査。3月早稲田	「本県の古墳に就て読者諸賢に

1924年	13年	大学理工科採鉱冶金科を卒業。 3月考古同士の州外見学(足利)。「古墳行脚」[野帳から]連載開始。 1月上毛考古会(臨江閣)の席で原田龍雄を知る。4月東京石材問屋萩島商店山梨県北都留郡初狩・5月山梨県の城址研究を始める意欲を示す。石和出張所主任となる。	お願い」(69号) 「群馬県古瓦発見地名表」(76号)
1925年 1927年	14年 昭和2年	9月後藤守一等の群馬研究旅行の案内をする。(覚堂、正作、武雄) 8月「石材工学汎論」の起稿と工場設計にかかる。12月大月に居を移す。 6月萩島商店を辞職。後大阪二宮商店石材部岡山県阿哲郡本郷出張所に勤務。6月長女和枝生まれる。	「古城址調査のしおり」連載
1928年	3年	9月中谷治字二郎と豊国覚堂、福島武雄等で吾妻郡の史蹟視察。 1月岡山県阿哲郡本郷村在留中同郡誌編纂を指導。1月鎌倉に中谷治字二郎をたずねて2日滞留する。	「箕輪城考上下」(136・137号)
1929年	4年	2月中等学校鉱物科教員免許状受領。4月豊国覚堂と殖蓮村恵下古墳の実地調査を行う。 8月中谷治字二郎と東北発掘旅行を行う予定だったが多忙で出来ず。 10月早稲田大学史学研究生を東道。	
1930年 1932年	5年 7年	2月上芝古墳址の発掘調査。4月保渡田八幡塚古墳の発掘調査。6月史蹟名勝天然記念物調査会臨時委員。 11月上毛考古会で箕輪城址を案内する。11月母ヒデ病没。12月病氣のため前橋市堀川町に転居。 3月病氣静養中。9月10日福島武雄没。 「群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告」第2輯刊行(福島武雄、岩沢正作、相川龍雄) 6月故福島武雄慰霊祭(臨江閣)	

註

- 1) 保渡田八幡塚古墳は群馬県群馬郡群馬町大字保渡田に所在する前方後円墳で、1929年(昭和4年)に福島武雄等の手により調査され、中堤上の前方部南東のA区からは円筒埴輪の長方形区画内に50余点の形象埴輪群が出土した。
- 2) 水野正好「埴輪芸能論」『古代の日本』2 角川書店 1971。
- 3) 上芝古墳址は群馬県群馬郡箕輪町上芝字本町に所在する帆立貝式古墳で、1929年(昭和4)開墾に際し発見され福島武雄等により調査された。この調査ではこれまで懸案となっていた円筒埴輪に関する新知見が数多く齎され、埴輪配列研究に新しい契機となった。
- 4) 大塚初重「埴輪研究の歴史」『考古学ライブラリー37・埴輪』ニュー・サイエンス社 1985。
- 5) 能登 健「群馬県における地方史研究の動向・考古・総説」『群馬文化』200号 1984。
- 6) 『人類学雑誌』44・6には柴田常恵の筆になる「上野国箕輪町上芝古墳」が掲載されている。
- 7) 『考古学』1・4に森本六爾「埴輪研究史略」と谷木光之助「埴輪の装置状態」があり、上芝古墳址発見の埴輪配列の意義について論述している。
- 8) 1914年(大正3)に豊国覚堂により創刊された郷土雑誌で、上毛郷土史研究会の機関誌でもあり1942年(昭和17)まで続刊され、総計300号を数える。
- 9) 京都帝国大学農学部農史研究室教授黒正巖がまとめた各県別の郷土史研究者名簿である。体裁はB5版葉半紙に謄写版印刷が施してある。
- 10) 上毛郷土史研究会は大正2年豊国覚堂が「郷土を愛するものにしてその歴史を愛せざるはなし」として、郷土研究から郷土愛の涵養をはかるために設立し、機関誌に『上毛及上毛人』がある。
- 11) 大正8年に福島博・武雄兄弟が中心となり創立された、群馬県におけるこの種の史蹟保存会の先駆けとして評価できる。
- 12) 佐藤錠太郎「上毛及上毛人の200号を祝し」『上毛及上毛人』200号 1933。
- 13) 豊国覚堂「復刊の宣言」『上毛及上毛人』1号 1916。
- 14) 岩沢正作「笠懸村古代瓦の窯趾発見始末」『上毛及上毛人』64号 1922。
- 15) 註5)に同じ。
- 16) 岩沢正作の毛野研究会は昭和4年に結成され、主に東毛地方中心の活動を行っている。
- 17) 毛野研究会の機関誌で、資金難から『毛野時報』という小冊子で発行されたこともあり、昭和19年4月まで通巻61号を数えた。
- 18) 相川龍雄『佐波の古蹟』伊勢崎印刷局出版部 1928。
- 19) 白石稲荷山古墳は群馬県藤岡市白石稲荷山に所在する前方後円墳で、1933年(昭和8)後藤守一の担当のもとに発掘調査されている。なお報告書は『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯として刊行されている。

- 20) 註12)に同じ。
- 21) 豊国覚堂「飽くまで郷土本位たれ」『上毛及上毛人』7号 1917。
- 22) 丸山知良「郷土の先学・豊国覚堂」
- 23) 『阪東日報』は豊国覚堂が明治35年に創立に参画した新聞で、高崎市で社長大島染之助、主筆西川権のもとで経理担当をしながら編集長として活躍した。
- 24) 豊国覚堂「迎大正10年之辞」『上毛及上毛人』号 1921。
- 25) 『上毛考古会』は郷土史の中でも考古学に興味を持つ同好の士の集まりで、その内容は蒐集遺物の紹介や情報交換が主であったと思われる。
- 26) 原田龍雄(1867～1945)は郷土史家で、早くから上毛郷土史研究会会員として活躍した。勢多郡誌編纂に際して郡史編纂主任として史・資料の蒐集にあたったが、業半ばで1945年前橋空襲で亡くなる。
- 27) 相川之賀(1866～1949)
- 28) 「要するに郷土史の研究や、之に付随する史蹟等の保存は、お役人等の御厄介になる迄も無く我等お互が自から進んで其祖先先人に対する重大なる責任を果たしたい、乃ち主客の転倒に陥らないだけの自覚を要したいと思うのであります。」と結び、郷土史研究に対する自立的な気概を示している。
- 29) 「想うに古墳の発掘物にして、その貴重なるものは、本邦廣しと雖も我が上野、武蔵、下野等の右に出る者は無からうかと存じます。而も其中で我が上野を以て首位におくべきものと信じます。是我が州人の誇とすべきであります。夫と俱に亦重大なる責任を自覚せねばならぬと存じます。」との認識を示し、「郷土本位」の思想にさらに踏み込んで行く。
- 30) 報告書に、黒板勝美・浜田耕作他『宮崎県児湯郡西都原古墳調査報告』宮崎県1915。浜田耕作・梅原末治『宮崎県西都原古墳調査報告書』宮崎県1917。原田淑人・内藤虎次郎他『宮崎県史蹟調査報告』3冊宮崎県、1918がある。
- 31) 豊国覚堂「本県の考古学史的元老」『上毛及上毛人』90号 表紙 1924。
- 32) 岩沢正作「吾が経路を顧み同学新進諸君に一言す」『上毛及上毛人』163号 1930。
- 33) 岩沢正作は『赤城山』1916、『妙義山』1917、『赤城山から庚申山』1922の一連の山シリーズを自費出版する。
- 34) 「鑛山師に苦められてしばった知恵袋、私が笠懸村鹿田山の麓に古代瓦即ち布目瓦のあることを発見したのは、今から十数年前のことである。」という文章で始まる岩沢正作の風貌さえ彷彿とさせる滑稽譚に近い発見始末記である。
- 35) 岩沢は環境問題についても関心を示し、「赤城山頂大沼増水問題につき当局有志に訴ふ」『上毛及上毛人』104号 1925。「赤城山の現状を述べて開発保勝に及ぶ」『上毛及上毛人』172号 1931。で赤城山の環境保全に積極的な発言をしている。
- 36) 大正15年(1926)6月第1号を刊行開始し、昭和3(1928)年6月第25号に至る。日本に於けるこの種の講座の最初のもので、多彩な分野にわたり、当時第一線で活躍していた研究者を網羅している。昭和初頭の講座として、研究者に大きな裨益をもたらした。(『日本考古学史辞典』)
- 37) 岩沢正作「上毛に於ける石器時代土器各派に就て(下)」『上毛及上毛人』117号 1927。
- 38) 昭和18年、梅原末治によって訂正・補説が加えられ、『校訂日本石器時代提要』として甲島書林から刊行された。内容は日本石器時代研究に必要な事項をとりあげた研究のガイドブックである。(『日本考古学史辞典』)
- 39) 群馬県佐波郡赤堀町今井茶臼山に所在する帆立貝式古墳。昭和4年(1929)東京帝室博物館の事業として後藤守一の担当で発掘調査をし、墳頂部における埴輪家群を明らかにして、古墳における埴輪家の意義や埴輪器財の研究を開く途をつくった。報告書は『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』帝室博物館学報6。1933として上梓されている。
- 40) 上芝古墳跡の発掘調査は昭和4年2月23日から3月9日にかけて実施され、当時としては異例の2週間という長期に及ぶものであった。
- 41) 岩沢正作「群馬県発見弥生式土器の新型式名」『毛野』34号 1939。
- 42) 福島博(1890～1972)福島武雄の長兄。総社史蹟保存会を創立し、群馬県史蹟名勝天然紀念物調査委員を務める。
- 43) 1924年(大正13)4月～1927年6月東京石材問屋萩島商店。1927年大阪市二宮商店。
- 44) 科学者としての矜持から発したこの思想に、福島武雄は「科学趣味」と名付けた。
- 45) 福島武雄「本縣の古墳に就て讀者諸賢に御願ひ」『上毛及上毛人』69号 1923。
- 46) 福島は「縣下石棺所在地名表」から石棺を5形式に分類している。
- 47) 福島武雄「群馬県古瓦発見地名表」『上毛及上毛人』76号 1923。
- 48) この福島主張は科学論文に多く見られるもので、『群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第2輯にほぼ実践されている。
- 49) 右島和夫「群馬県における地方史研究の動向・考古・古墳時代」『群馬文化』200号 1984。
- 50) 福島武雄「古城址調査のしおり」『上毛及上毛人』128～130。132～135。140号 1927～1928。
- 51) 福島武雄「箕輪城考」『上毛及上毛人』136。137号 1928。
- 52) 福島武雄「大胡城考」『上毛及上毛人』141号 1928。
- 53) 福島武雄「大坂城の巨石」『サンデー毎日』53号 1928。
- 54) 近年中世城館研究の第一人者として山崎一氏の仕事(『群馬県古城址の研究』上・下 1972。『群馬県古城址の研究』補遺編上・下 1979)が評価されているが、該研究に先立つものとして福島武雄の「城の研究は立派に考古学の一分科」とする城郭研究は注目に値する。
- 55) 註45)に同じ。
- 56) この梅原の『久津川古墳研究』とともに、浜田耕作・梅原末治の『近江国高島郡水尾村の古墳』(京都帝国大学文学部考古学研究報告 第8冊 1923～1924)が『群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第2輯の作成に影響を及ぼしたものと思量

される。

- 57) 1918年の松本彦七郎による宮城県宮戸嶋里浜貝塚の発掘や1924年八幡一郎・山内清男・甲野勇等による加曽利貝塚の発掘がある。
- 58) 松本彦七郎(1887～1975)は古生物学の「地層累重の法則」と「標準化石の概念」を考古学に応用し、東北地方の貝塚遺跡の分層発掘を実践した。また山内清男等の加曽利貝塚の発掘が端緒となって、縄文土器の編年研究が活発に推進され、以後、急速に学界の研究の主流を占めるようになった。(勅使河原彰『日本考古学史』1988 東京大学出版会)
- 59) 中谷治宇二郎(1902～1936)先史学研究・縄文土器研究に大きな足跡を遺し、主な著書に『日本石器時代提要』(1929)、『日本先史学序史』がある。
- 60) 中谷治宇二郎『随想考古学のゆく道』1934。
- 61) 内山留一郎「箕輪城址本丸御前曲輪古井戸出土五輪塔金石文について」『上毛及上毛人』127号 1927。
- 62) 福島武雄「箕輪町上芝古墳の遺跡発掘概報」『上毛及上毛人』144号 1929。
- 63) 浜田耕作の『通論考古学』(1922)は、彼がヨーロッパで学んだ実証的方法を体系的に紹介し、日本考古学にはじめて科学的な考古学の研究方法をもたらした点で画期的であった。
- 64) 『通論考古学』第3編 調査。第1章 考古学的発掘。43 発掘の価値より。
- 65) 後藤守一『日本考古学』1927 四海書房。
- 66) 前掲『日本考古学』第3章研究、聚成より。
- 67) 福島武雄・岩沢正作・相川龍雄『群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第2輯 1932。
- 68) 柴田常恵「上野国箕輪町上芝古墳」『人類学雑誌』44・6 1929。
- 69) 保渡田八幡塚古墳の発掘調査報告は『群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第2輯に掲載されている。
- 70) 岩沢正作「箕輪町新発見古墳の一部を埋没する火山屑層について」『上毛及上毛人』144号 1929。
- 71) 註62)に同じ。
- 72) 註4)に同じ。
- 73) 谷木光之助「埴輪の装置状態」『考古学』1・4 1930。
- 74) 註62)に同じ。
- 75) 『群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第2輯凡例より。
- 76) 註49)に同じ。
- 77) 森本六爾「埴輪研究史略」『考古学』1・4 1930。
- 78) 福島武雄「保渡田八幡塚外囲発掘概況」『上毛及上毛人』146号 1929。
- 79) 註39)参照。
- 80) 堀川定夫「茶臼山古墳に就いて」『上毛及上毛人』154号 1930。
- 81) 註39)参照。
- 82) 註29)参照。
- 83) 註45)に同じ。
- 84) 註5)に同じ。

参考文献

- 石井 進・萩原三雄『中世の城と考古学』新人物往来社 1991。
江坂輝弥「中谷治宇二郎集」『日本考古学選集』24 築地書館。
大岡軍之丞「郷土史研究の人々」『群馬文化』74号、1964。
木村 礎・和歌森太郎・古島敏雄『明治大正郷土史研究法』1970。
工藤雅樹「ミネルヴァ論争とその前後」『考古学研究』20・3 1974。
児玉幸多・林 英夫・芳賀 登編『地方史の思想と視点』柏書房 1976。
斎藤 忠『日本考古学史辞典』東京堂出版 1984。
斎藤 忠『日本考古学史』吉川弘文館 1974。
高橋龍三郎「ミネルヴァ論争の背景」『古代探叢』1980。
勅使河原彰『日本考古学史』東京大学出版会 1988。
日本考古学協会編『日本考古学辞典』東京堂出版 1962。
原田龍雄「福島武雄氏小伝」『上毛及上毛人』202、203 1933。
丸山知良「豊国覚堂年譜」『群馬文化』50号、1961。